
楽音のイディアー

一口人口一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

楽音のイデИАー

【Nコード】

N40480

【作者名】

一口人口一

【あらすじ】

2030年代、音楽シーンは未だ20世紀の懐古趣味が主流だった。メジャーデビューのチャンス掴みかけたバンドのギタリスト・霜井怜は、突然のメンバーとの行き違いに戸惑う。そこへ新興マネージメント/レコード会社の木乃内依緒が現れる。依緒は、怜の想像を絶する目的を持っていたのだが・・・。

第1章（前書き）

この書を、未来のプログレッシヴ・ロック・ムーブメントへ捧げる

第1章

管弦楽の最初の大音響が、一瞬にして全身の細胞を四方に飛び散らせた。

全ての楽器が力強くフォルティッシモを唸らせた後には、にわかに静寂がおとずれた。

交響曲が振動させるこの広大な空間と、彼自身の肉体との境目が、あいまいになっていく。

やがてゆつくりと何層もの和音と旋律が複雑に折り重なりながら共鳴し合う。その残響が虚無な空間から色と形を産み出し、明るく照らされた大地と花々、日中の雲と空と太陽、その上方に層を成す漆黒の暗闇に仰ぎ見える月と星々が、同時に共存する名状しがたい景色を創造していく。

低音楽器群が地平線の向こう側まで敷き詰めた、色鮮やかな山々の壮大な景観の上空で、ヴァイオリンとフルートは絡み合いながら、幻想的な旋律を踊り始める。

「こんなメロディ、初めて聴いた……」

彼の意識は粒子となってこの音場を漂いながら、旋律の周辺で、その高低に合わせて翻弄されるように、浮かんだり沈んだりしていた。

彼の内側にも、外側にも、音楽はあった。

「このメロディ……なんて言ったらいいんだろう……」

時折ホルンの和音がオーロラのような風となって、彼を柔らかく撫でては去っていく。

ヴァイオリンは少しずつテンポを上げ、転調を繰り返しながら、天空へと駆け上がっていく。太陽に届かんばかりに急上昇するそのなめらかな表面からは、七色の光を反射している。

この第一主題が呼び起こすものは何だろうか？

自分の肉体が存在するよりずっと遙か昔からやってくる郷愁なのか、絶対に手に入らない何物かへの憧れなのか、あるいはその両方なのか？

彼の言葉にならない思念はその正体を突き詰めようとするが、全くの徒労だった。

彼は同時に満たされてもいた。永久にこのままでいたい気持ちだった。しかし、それを幸せ、などという言葉で表現することはできなかった。

ここは昼と夜とが共存する世界。

一瞬一瞬の響きの中に、至上の喜びと狂おしく切ない痛みが混在している。

ここには全てがある、そうとしか言えない世界なのだ。

「これは、誰がつくった曲なんだろう？」

彼の意識に、新たな疑問が浮かび上がった。

「これは、人間がつくった音楽なのか？」

旋律は段々と壮麗な和音を引き連れながら、さらに激しく、高く、中空を舞い続ける。

「こんな、こんなすごいものをつくれる人間がいるのか？」

音楽は決してその疑問には答えてくれない。ただただ美という圧倒的なエネルギーを鼓舞しながら、この空間全体を支配する帝王として振る舞っただけだ。

「オレには、こんな音楽は、絶対につくれない……」

舞い上がるようなこれまでの感情とは対照的な、沈み込むような嫉妬と失望感が彼の意識にまわりついてきた。急速に、音楽の放つ至福から心が離れていくのを感じた。

「オレは今まで音楽のために全てを捧げてきた。やれることを全部やってきた。だけど……」

彼は力を弱めながら、旋律から遠ざかり、ゆっくりと落下していった。

落下は加速を強めていった。

「オレにはとても、こんな音楽はつくれない……無理だ」

もし、愛している女が、目の前で別の男とキスしているところを偶然に見てしまったとしたら、このときの彼に似た気分が体験できるかもしれない。

しかしその例えで言うなら、彼の心を残忍に引き裂いているのは、その二人の並び立つ姿の、あまりにもお似合いな、世界の真理に触れたかと思うほどの調和に満ちた、そしてそれ以上は言葉にならないほどの美しさであった。

彼はなおも、敗北感を抱きながら落下し続けたが、それでもトラペットが奏でる新しい旋律は、まるですぐそばで鳴っているかのようにくつきりと彼の耳に届いていた。

すでにその美を受け止める力が残されていない彼にとっては、その音はもう耳障りですらあった。

「オレには……無理なんだ……」

拡散していた彼の粒子は収束し、硬く浅黒い固まりとなって、さらに落下の加速を強めていく。

そして、下に引つ張られる力とは別の、軽い横揺れで、彼は目を覚ました。

「新宿、新宿、ご乗車、ありがとうございました」

電車内の照明光が容赦なく怜の目の中に差し込んでくる。

怜は息を吞んで座席から立ち上がり、電車から降りた。

（危なかった・・・乗り過すところだった・・・）

しかし、ここで安心してはいられなかった。彼はすでに時間に遅れていたのだ。

たった30円の電車賃をケチるために、一駅歩こうと思い立ってしまったことが、遅刻の原因だった。

彼はホームのエスカレーターを駆け下りた。

腕時計を持っていない怜は、駅構内の時計を見た。8時半。彼のバンドの演奏予定の時間と同じだった。ブッキング・ライブの、トリから数えて二番目の出番だ。

怜のバンド、彼がギターを担当するロックバンド、「イエローアウル」である。

しかし、その日、怜が演奏することはない。その日に限っては、彼は客として自分のバンドのライブを観に行くのだった。

彼は腱鞘炎になっていた。ギターの練習のし過ぎだった。

もともと人一倍練習熱心な方だったが、最近さらに無理をしがちな状況、というのがあった。

ライブをたまたま観に来ていた大手のウルテマ・レコードのスカウトが、バンドを気に入ってくれて、演奏をもう何回か観て見極めた後に、契約したいという話を持ちかけてきたのだ。

バンドはそれからリハーサル回数を増やし、連帯を強めていっ

た。バンド結成から6年間、憧れ続けてきたメジャーとの契約を、どうしてもつかみ取るために。

怜の左手の異常は、まずバイト先で現れた。工場の軽作業で一日に二度も品物を床に取り落とし、ひどく怒られたのだった。そのバイトは辞めざるを得なかった。

指に瞬間的に力が入らなくなることがあるようだった。

医者に診てもらうと、しばらくはできるだけ安静にするように、ということだった。症状が慢性化しないように、ギターの演奏はしばらく控えざるを得なかった。

そこでバンドのメンバーは、兼ねてから仲の良かった別のバンドでリーダーをしているギタープレイヤーに、無理を言って一回限りの代役になってもらい、今回のライブを乗り切ることにしたのだ。

怜は新宿駅の改札を出て、11月の街並をライブハウスへ向かって走り出した。

安物のナイロンコートの襟元や袖口の隙間から、冷気が入り込んできた。

この街は、細かい部分では変化しているが、本質的には何十年も前からそれほど大きな変化はしなくなっていた。

今は西暦2032年。もう、ロックが生まれた時代を生きていた人間は、地球上にひとりもない時代。

軒を連ねる店は、ところどころ新しいのができては消える、というのを繰り返している。

しかし、21世紀がはじまったばかりの頃と比べて、驚くほどの違いはない。

ファッション、デザインは、全く新しいスタイルが流行するということはなくなった。

流行は、20世紀後半に確立されたいくつかの様式のリバイバルとマイナーチェンジが繰り返されているだけになって、この時代に至っている。

今は、1960年代が流行の主流にあった。それは、音楽にも同じことが言えた。

怜の普段着は、そうした時代の流れとは特に関係ない。いつも同じ薄手のコート、安価な合成繊維でできたトレーナーとジーンズもどきだった。

怜は、ライブハウスが近づいてくる頃になってようやく、電車内で見ていた夢のことを思い出した。

ここ数年、年に何回か似たような夢を見ていたが、さっきのほど鮮明な映像と音のものは初めてだった。

（そういえばあの夢、あんな曲聴いたことないぞ・・・ってことはあれって、結局オレがつくった曲ってことになるんだよね・・・）
そもそも、10歳の時に見よう見まねでギターを始めただけの怜にとって、交響曲の作曲はもちろん、譜面を読むことすらまともにできなかった。

だから、夢の中のオーケストラが彼の想像の産物であったとしても、彼にはそれを移し取ってこの現実の世界へ引き出してくる方法がないのだった。怜自身も、すぐにそのことを悟った。

頭の中で、あの夢の交響曲の旋律を想起しようとしても、ただの1小節足りとも思い出せなかったのだ。

ライブハウスは雑居ビルの地下にあった。幅の狭い階段を下るとそこにいた受付の人に「招待です」と言っただけで自分の名前を告げた。

「すいません、こちらにそのお名前がないようなんですが・・・」
店員が困った顔をした。

バンドのメンバーが書いた、今日のライブに無料で入れる招待者のリストが店員の手元にあるのだが、その中に怜の名前はなかった。

店員に迷惑をかけてもいけない、と思った怜は、仕方なく正規のチャージを払って中に入った。

バイト暮らしでギリギリの生活をしている人間にとっては特に、どんなことであれ、思わぬ出費というのは決して気持ちいいものではない。

（後であいつらに文句言わなきゃ。バンドのメンバーに金払わせるなんておかしいだろって）

ドアを開けた瞬間に大音量を浴びせられる。もうすでに怜のバンド、『イエローアウル』の2曲目の演奏が始まっていた。

レコード会社の人も来てるだろうか？ 立ち見で150人ほどのキャパがほとんど埋まっている観客を見渡した。その担当者は、向こうの左側のスピーカーの横の方で、腕を組んで観ていた。

『イエローアウル』は、この時代の流行のひとつとなっていた、1960年代のモッズサウンドのようなシンプルでスピード感のある楽曲に、怜のどこかサイケで難解なギターアレンジが重なった、ポップなロックバンドだ。

バンドの演奏は、怜にとってもかなり満足のいくものだった。

江藤のドラムと、水谷のベースは、ここ一ヶ月のハードな練習のおかげか、格段に息がびったりと合うようになってきていた。

そして、声がよく伸びる津山のボーカル。バンドのフロントマンとして堂々としたパフォーマンスができるようになってきていた。フロアの前の方には、津山の女性ファンたちが、時折歓声を上げていた。

音楽的な面でのまとめ役の立場として、こうして自分のバンドのステージを客観的に見る機会を持てたということは、今後の活動にもプラスになるだろうことを、怜は確信していた。

（オレたちってホントにいいバンドなんだよな。自信持っていいる

だ。メジャーシーンで活動していく前に、あいつらを客側から観られて本当に良かった。そう思えば今回ライブを休むからって、あんなに落ち込むこともなかったのにな)

怜はホッと安堵の一息をついた。

そして、彼が一番気になっていたのは、代役のギタープレイヤー、吉沢のことだった。

短い準備期間の中で、曲を憶えていい演奏をしてくれるかどうかという不安もある一方で、もし自分より良い演奏をされてもイヤだな、というライバル心もあり、複雑な心境だったのだ。

実際のところ彼は、怜よりもシンプルな演奏で、バンドに溶け込んでいた。約一ヶ月の練習で、よくここまで自分が抜けた穴をきれいに埋めてくれたと、怜は感謝したい気持ちもあった。背丈は怜よりも高く、ルックスも良くて、ステージでの存在感はとても代役とは思えない。

が、やはり、メンバーと6年間もいっしょにやってきて、バンドのアレンジに中心的に貢献して来た自分の演奏の方がずっと上回っている、という本音もあった。

4曲目のバラードの幻想的なイントロ、怜のお気に入りのギターのアルペジオで始まるのだが、代役の彼にはうまく弾ききれなかった。

その部分の演奏には、ギタープレイヤーとしての自分の個性が凝縮されている。他の人に言ったことはないが、密かに彼が誇りとしているイントロだった。

(来月のライブでは、オレがあの部分をちゃんと弾いて見せなきゃな。ウルテーマレコードの人も、オレの演奏をきくと気に入ってくれるはずだし)

怜は、来月に復帰するバンドでの自分の演奏を想像して、うずうずし始めた。

イエローアウルの演奏が全て終わった直後、彼は楽屋へ訪ねていった。

「おう、お疲れさん！演奏良かったよ！」

ドアを開けて元気よく声をかけた怜。

だが、思いの他バンドのメンバーはみな一様に疲れた顔つきでうつむきがちだった。楽屋にはすでに、レコード会社の人も来ていた。「今回はみんなに迷惑かけて悪かった。すまなかった。来月からまたがんばるから……でもな、オレからチケット代取るってひどくないか？」

「……ああ、悪かった」

ボーカルの津山がようやく口を開いた。そしておもむろに財布から二千円を出すと、怜の手につかませた。

「いや、おい、オレ本気で怒ってるわけじゃねえぞ、これじゃオレが釣りださなきゃいけないし……」怜は半ば無理ににやけてみせた。

「いや、いいんだ」津山はそういうと他のメンバーに目配せした。

それが合図になって、みんなが一斉に楽器を抱えて楽屋を出始めた。

「あと、今後のことだけど、オレ来週からリハに出られるから……」

・「怜は、目を合わせようとせずにもせずにドアをくぐっていく他のメンバーに向けて早口で言った。

「うん、あとでメールする」

津山はそう言うと、先に出て行ったメンバー達の動きに吊られていつしよに楽屋を出ようとする怜を制するかのように肩に手をかけ、そして後から親しみを込めるかのようにポンと軽く叩いた。そして、足早に怜から離れていった。

レコード会社の人はいち早く部屋を出ていた。結果的に、怜だけが取り残されるかたちになった。

「おい、待てよ、どうしたんだよ？」

怜はわけがわからないまま楽屋を飛び出し、ライブハウスを出て行くこうとするメンバー達に声を荒げて呼びかけた。彼らはもう振り

向かなかった。楽屋の外はすでに次のバンドの演奏が始まっていて、その音量にかき消されてしまった。

演奏中のトリのバンドは集客力のあるバンドのようだった。フロアはさつきよりもすし詰め状態になっていて、怜は彼らを追いかけようにも、出入り口まで人ごみをかき分けていかなければならない。怜に、ようやくメンバーに対する怒りがわき上がって来た。

出入り口へ行く途中、女の口の手がどこからか怜の手首を握りしめて来た。この混雑の中で、いっしょに来た彼氏の手と間違われたのだろう。怜はますます苛立って、それを乱暴に振り払うと、出口のドアを力一杯開き、地上への階段を二段飛ばしで駆け上がった表へ出た。

息を切らして雑居ビルの面している通りを見回すが、もう彼らの姿はない。

怜はがつくりとうなだれた。

「・・・・すいません」

（一体何があったんだろうか。

いや、考えるまでもなく、あいつらがオレのことを避けていることは確かだ。そして、もうオレを必要としない可能性が高い。

オレが今回ライブを休んだことで、何か誤解ができたんだろうか？オレのやる気が疑われるような、何かとんでもない誤解が？たった一ヶ月の間に？

オレたちは高校を出てから6年間、ずっとメンバーを変えずにいっしょにやってきた。そして、津山のボーカルと作曲の才能を最大限に生かした音楽をつくる、ということ、誰よりも一番大事に考えてバンドを支えてきたのはオレだったはずだ。

それがみんなには伝わっていると思っていたのに・・・・一体どんな勘違いがあったんだろう・・・・？

とにかくできるだけ早く話し合って、行き違いを解決しなくちゃ）

怜は携帯を取り出して、津山に電話をかけようとした。その時、
「・・・・あのお、すいませーん」

背中のおすぐ後ろで声がした。

怜が振り向くと、そこには背の高い女のコが立っていた。

怜もそれほど身長が低い方ではなかったが、彼女はほぼ怜と変わらない背丈だった。

周囲が暗かったのではつきりとはわからないが、薄い色柄でロングのワンピース、ふわりとした髪が胸元の位置まで長い髪は、サイドに細い編み込みが入っていたのは見えた。

今も昔も、天井に配管がむき出しになっている地下のロック系ライブハウスでよく見かける感じのコ、という雰囲気では決してない。この道の通りすがりだろうか、怜は最初にそう思った。

「はい？」 怜は内省から頭を切り替えるのが精一杯で、返事をする声のトーンに気を使っている余裕はなかった。

「やっと気づいてくれたあ。ライブハウスの中で何度も呼んだんですけど・・・・あのすいません、手をつかんじゃって」

彼女は深く頭を下げたが、それほど申し訳なさそうでもなかった。

「ああ、で、何か・・・・？」

「・・・・あの、イエローアウルの人ですよ？ 霜井しもい怜さん、ですよ？」

「あ、ええ、まあ・・・・」

彼女の質問は難しかった。今まだ自分がメンバーと言えるのかどうか、彼自身にも確信がなくなってきたのだから。

「今日、イエローアウルを観に来たんです。でも、あなたは出てませんでしたね？」

「うん、まあね、いろいろ事情があつてね・・・・」

どうしてこうも答えにくいことばかりなんだろう？ 怜は内心少し苛立った。

（このコは津山のファンなんだろうか？ それとも、メンバーの知り合いなのか？）

津山の今の彼女とはまったく違うはずだし、まさか江藤の？
というより、メンバーと仲が良いなら、オレとメンバー間の確執について、何も知らされてないのだろうか？

また、いろいろな考えが怜の頭を巡った。

「ちょっと遅かったね、他のメンバーはもう店を出ちゃったんだ、残念だけど、ちょうど今……」怜は言った。

「そうなんですか？それなら、それでもいいんです」彼女はにっこりしてみせた。

そして、奇妙な間をつくってから、取ってつけたように言った。

「今日は、あなたに話があつて来たので」

「えっ、オレ？ オレに？」

怜に思い当たるところは何もなかった。

「私、アイオンレコードの、木乃内と申します」

彼女は名刺を差し出してきた。

「木乃内……どこかで聞いたような……」

そこには、アイオンレコード マネージャー 木乃内依緒きのうち いおと書かれていた。

第2章

「これからお時間いただけませんか、30分くらい。霜井さんにお話したいことがあるんですが、この辺の喫茶店かどこかで・・・」
依緒は頭を下げた。今度は、その態度から彼女の真剣さが怜にも伝わってきた。

「はあ・・・、まあ、『下層』でも入れそうなお店だったらいいですよ」

怜は自分を卑下するつもりはなかったが、初対面の人に自己紹介をする際には、自分が下層階級出身であることは早めにはつきりさせておきたい、という気持ちがいいつも強かった。

安物でそろえた普段着を見れば、東京ではたいていの人にはわかってしまうのだが、バンドでいる時には、全員それなりの衣装でそろえることもあり、言わないとわからないこともあった。

怜は一度、階級を偽ってふるまったために、その当時の彼女の前で大恥をかいたことがあった。それ以来、彼にはその「下層力ミングアウト」が信条になってしまっていた。

「大丈夫ですよ、今日はこちらで出しますから、好きな物頼んで下さい」依緒は怜にメニューを差し出した。

怜と依緒の二人は、懐かしいレイアウトの喫茶店に来ていた。いわゆる、古き良きアメリカ、のイメージだ。しかしこの時代の、怜くらいの二十代半ばの世代には、単に今風でおしゃれな印象に映った。

怜はコーヒーを注文すると、再び津山の携帯へかけてみた。やはりつながらなかった。

「実はイエローアウルサイトに、メールをお送りしてアポを取る

うとしたんだけど、お返事をもらえなかったの。今日ここで突然声をかけてびっくりさせちゃって」依緒は言った。

「サイトの管理はドラムの江藤がやってるから、オレは知らなかったんだ」怜は窓に目をやった。

「それに、さっきも言ったけど、イエローアウルはもう別の会社と契約寸前まで来てるから、江藤はメールに目を通してたとしても、興味がなくなつて返事しなかったのかも」

「そうですか、私が遅かつたんだ・・・」依緒がうつむいた。

「イエローアウルのこととは津山と江藤を通して話してくれないと、もともとオレには活動のことを決める権限はないからね」

「ええ、今日は霜井さんに、お話を聞いてもらえるだけでいいです・・・」

依緒は、頭の良いコではあるのだろうが、どことなく社会に出たてみたいな頼りなさも垣間見えた。

店内の光の元では、暗いところでの印象以上に、依緒はとても清楚で美しい女性だった。ロングのサイドを一本編み込んで先端を固定した髪から出た片側の耳が、怜にはヨーロッパ民話の妖精を想起させた。

「私、イエローアウルにとっても惹かれるものがあって、もし条件が合えば、うちのアイコンレコードとアルバムの契約をしていただきたいと思って来ました」そう話す依緒の眼には力があつた。

「アイコンレコードって、聞いたことがないんだけど、どんな会社なんですか？」

「今年立ち上がったばかりの新しい会社で、小規模ながらアーティストのマネージメントとアルバム制作を一括して行なっています。ウィーン本部とメンフィスに支部があり、東京に二つ目の支部ができました。」

私たちは、商業主義に捕われない、音楽の新しい価値観を啓発してくれるアーティストを、ジャンルに関係なく求めています」

と依緒は、何かを読み上げるかのように答えた。

新しい音楽・・・ジャンルにこだわらず・・・もうどこかでイヤというほど耳にしてきた募集のキャッチコピー、という印象を、怜は拭いきれなかった。実際、そういうオーディションなどで、本当に新鮮だと思える新人がデビューした試しなどないじゃないかと。

「それで、今、他に2つの海外バンドとの契約が決まったところなんです」

「他の2つはどんなバンドなんですか？」怜は少しだけ興味を刺激された。

「ひとつはウィーンでデビューするアーティストで、スウェーデン出身のガムラン奏者と、カメルーン出身の和太鼓奏者、モンゴル人のディジュリドウ奏者の3人が中心になっているユニットです」

「へえ、その3人が、どうやって知り合ったのかは気になるけど」怜は、その時点では、ディジュリドウがどんな楽器かも知らなかった。

「話すと長くなりますよ」

「いや、いいです。それで、もうひとつは？」怜は来たばかりのコピーヒーを口に含んだ。

「アメリカに留学中で人工頭脳の研究をしているイスラエルの学生がつくった、即興演奏をするソフトの音楽です。他のプレイヤーの演奏にリアルタイムで反応しながら、生き生きした素晴らしいアドリブをするんですよ」

確かに、キャッチコピーに違わず、ジャンルに捕われない新しい価値観、と怜は感じた。しかし、それはイエローアウルのやっているポップなロックとはまるで畑違いであった。

「話を聞く限り、他の二つのアーティストは、すごく個性的・・・っていうより、オレたちとは世界が違う、実験音楽っていう感じだよね？」怜は首をひねった。

「そこは特に気にしていません。私たちは・・・」

「ジャンルに関係なく求めてる・・・でしょ？　とは言っても、レーベルカラーっていうのはあるんでしょ？」

「私たちは、音楽をうわべのスタイルだけで判断してません。イエローアウルには、私たちのカラーとすごく近いものを感じたんです」
依緒は、自分の審美眼に関しては、絶対的な自信を持っているようだった。

「イエローアウルのどの辺が近いの？」　怜はそれが知りたかった。

「霜井さんのギターです」　依緒の声は大きかった。

「えっ？　オレ？」

「今日、霜井さんがいないイエローアウルを観て、はつきりわかりました。私が好きなのは、やっぱり霜井さんのギターなんです。特にあのバラード、なんていう曲でしたっけ？　あのイントロのアルペジオ、まるでジャズかフランス近代音楽みたいな響きで、ホントに素敵です・・・！」

怜は、フランス近代音楽を知らなかったが、ほめられて決して悪い気はしなかった。特に、依緒が注目していたところは、自分が密かに誇らしく感じていた演奏でもあったのだ。しかし、ほめる場所があまりにもピンポイント過ぎるために、若干奇妙な感じは否めなかった。

「そ、そうか？　ありがとう・・・で、津山は？」

「津山さん？　ああ、ボーカルの方ですか？　はい、ええっと、歌がとっても上手、ですよ・・・それに、顔立ちがとってもカッコいいと思います！」　依緒は急に高揚したように話したが、やや慌てた様子でもあった。

イエローアウルは津山を中心としたバンドじゃないか！　この人は、ボーカルに関してはどうしても素人臭い評価なのだろうか？　怜は怪訝な表情を隠せなかった。

とそのとき、怜の携帯がメールの着信を伝えた。津山からの連絡だと確信した彼は急いで画面を見た。

『今日はすまなかった。』

実は、俺たちは、ギターに新しく吉沢を入れてやっていくことに決めた。それは会社の人の希望だ。吉沢はかなり気に入られたようなんだ。

直接言えなくて悪かった。怜もがんばってくれ。』

怜の全身から力が抜けていった。

怜が育ててきた6年間の友情と、バンドへの情熱、そしてメジャーデビューへの憧れが、こんなにそっけない言葉で清算できるはずもなかった。

「オレはイエローアウルをクビになった……」怜の口から、その言葉は吐き出された。

「えっ………なんで？」

「わからない。ウルテーマレコードの人の意向らしいけど………」

「」

依緒は何も言わずに怜を見つめていたが、いろいろ考えを巡らせているようだった。

「オレはまだ、ちゃんと自分の演奏を聴いてもらってもいないんだ。きっと、メンバーの中でオレひとりだけが下層出身だからとか、見た目が吉沢の方がいいからとか、そういうことなんだ………そういう、音楽とは直接関係ないところで判断されちゃったんだろう………」

「……」怜は依緒に説明するというよりも、独り言のようにつぶやいた。

「………」

依緒はしばらく黙っていたが、やがて絞り出すように言った。「そう、かもしれないね………状況からすると、きっと、そうなんだと思います」

怜はその言葉でさらに落ち込んだ。自分を卑下するのを、根拠なしでもいいから慰めてほしかった、そんな自分の甘えに気づいて、ただただ情けなかった。

「でも、でもね、よく考えてみて。そういう風に人のうわべだけを見て、音楽をないがしろにしているような連中にマネージメントを任せて、それでいいの？　それでミュージシャンとして、満足なの？」

怜は何も答えられなかった。怜にとっては音楽がすべてであり、イエローアウルこそが怜の音楽のすべてだった。それ以外の理屈を考える余裕などなかった。

「イエローアウルがないなら、もう仕方ないじゃない、霜井さんは……」

「ちょっと黙ってよ！　わかってない奴がいきなり勝手なこと言うなよ！」　怜は感情をぶちまけてしまった。が、すぐにそれを後悔して肩を落とした。

「……ごめんなさい」　依緒はうつむいた。「今日は、これ以上私と話が進められる状況じゃないよね」

「今日は、とかじゃなくて」　怜は首を横に振った。「オレのバンドはなくなったんだ。オレの音楽は終わった。イエローアウルに興味があるなら、津山の携帯番号教えるよ。オレと話を進めても、もう意味ないだろ？」

「そんなことないよ！」　依緒は意外なほどの勢いで、身を乗り出してきた。

「こんなことであきらめたら、ダメなんだよ、わかってるの？」　敬語を使うのも忘れた依緒には、なんとも言い難い気迫があった。

怜と依緒は、喫茶店を後にし、新宿駅の東口まで来ていた。

「車で送って行ってもよかったのに」　依緒はそのことについて再び聞いてきた。

「いや、ほんとにいいんです」　怜は遠慮した。

生きがいだったバンドを追い出された失望感に満たされ、早く一人になりたいというのが本音だった。そうでないと、この初めて会

ったばかりの可愛い女の口に、また八つ当たりしてしまう失敗をやりかねない。

そしてそれ以上に、初対面にもかかわらず、異常なほど自分に親身になってくれる依緒に対して、かえって警戒し始めていた。彼はそこまで自分を勘違いはしていなかった。

「今日は、ありがとうございました」依緒が礼を言った。

「いや、こちらこそ。オレ自身の問題なのに、いろいろ聞いてもらっちゃって……」怜も落ち着かず、頭を下げるように身体を揺らした。

「もう一度、演奏を聴かせて下さい。イエローアウルの曲以外の音楽を演奏する霜井さんが、一度観てみたいから……もしギターを弾く時があつたら、名刺を見て連絡を下さい。必ず観に行きますから」

依緒はそう言うとき軽く別れの会釈をして、人ごみの中へ消えて行った。

帰りの電車の中で、いろいろな思いが怜の頭を巡った。

（この東京には、星の数ほど、プロを目指すアマチュアバンドが活動している。

その中でも、津山のボーカルはひととき光るものがある。そう信じてオレはこの6年間をやってきた。そして津山の歌を引き立てる演奏をするために、ギターを弾いてきた。

津山がオレから離れていった今、自分には音楽業界の人から注目されるだけの価値は残されていない、それは、この6年間で見てきたたくさんのバンドの演奏レベル、そして味わってきたたくさんの苦い評価から、容易に計り知ることができる、そう怜は考えていた。それなのに、木乃内依緒という口は、オレの音楽性のどこに魅力を感じたのか？

とても純粋な口のようにあつた。でも、何か隠された目的があ

るようにも見えた)

(そして、アイオンレコードという会社。たいした業績も上げていないようなのに、国際的な活動をしているという。どこかの大資本のバックアップなしには不可能だろうが、ヒットする気配もなさそうな、マニアックな音楽だけを扱おうとしているところも不可解だった。どんなレコード会社なんだろうか?)

ギターを弾きたい、という気持ちだが、これから自分の中から再びわき上がってくるのかどうか、その時の怜にはわからなかった。

しかし、もし弾きたくなった時には、依緒の目の前で弾いて見せたい、その気持ちだけは浮かんできていた。

第3章

ここ数十年で、音楽をはじめとした文化は、特に進展を見せず、10年程度の短い流行の周期をループし続けるだけだった。

しかし、怜たちが生きる2030年代までに急速に進んだものがある。

それは社会階層の形成だった。

もう、「格差」という言葉は、すでに死語になって久しかった。差を意識することは、お互いにとって不幸なことだと、皆が気づき始めた。むしろ、しっかりと区別することの方が良策と思われたのだ。

あらゆる文化や娯楽、商品は、それぞれの上流、中流、下層のそれぞれのニーズに合ったものに完全に区別されるようになったことで、社会は2010年代からの壊滅的な経済不況から少しずつ回復し始めていた。

それは、音楽のジャンル分けにすら、大きな影響を与えた。

東京には、全く新しい貧困層によるスラムが、老朽化しているが諸事情から取り壊しができない旧都営団地の周辺地域に数多くできていった。主に、老人ホームなどの公営施設の建設が中断した土地に、トタン板などを使った手作りの家の集落ができていったのだ。近隣住民による排除運動も功を奏した例は少なく、行政も黙認せざるを得なかった。

怜は、下層の中でも、かろうじてまっとうに生活している家族の元に生まれたが、幼い頃から、周辺のスラムの連中と接することが

多かった。共働きの両親からは放任される一方、スラムの大人たちの間では可愛がられていたのだった。

外国とは違って、日本の新しいかたちのスラムでは、子どもは非常に少なく、珍しがられる存在だった。

40代、50代まで、引きこもりや生活もままならない低賃金労働を続け、扶養されていた親の死後に、生活能力を持たないままスラムへ放り出された、高齢のいわゆる独居ニートが、住人の大半を占めていた。

スラムの中には、ごく一部ではあるが、驚くべき才能を持った人たちがゴミに埋もれるように生活していた。

ネットの世界で膨大な知識をむさぼり、それを社会に還元することもなく自らの無益な妄想を肥大化させていく者。高学歴・高収入だったが、人生の意義を見出せず競争社会からドロップアウトした者。そして、その価値を認められないままくすぶっている芸術家、などだ。

怜は、そんな知の混沌、とも言えるような人たちに揉まれて、有用な知識も、無用でくだらないことも、人間不信になりそうなイヤなウワサなども、たくさん教えられて育ってきた。

ギターを始めたのは10歳の時だった。この一点だけを見れば、むしろ中流並に恵まれた音楽環境だったかもしれない。

教えてくれたのは、昔はハコバンでピアノを演奏していた、スラムの老人、三野だった。

ハコバンとは、夜の店などが抱えている生バンドのことで、店内でBGMを演奏するのが仕事なのだが、2030年現在ほぼ絶滅してしまっている職業だった。

彼は、高級住宅地で捨てられていた粗大ゴミのギターを拾ってきて、一週間ほど弾いた後に、自分にはすでに新しい楽器を習得する

気力がないことを自覚すると、それを怜にタダで譲ってくれたのだ。ただ、ピアニストであった彼は、ギターのチューニングをよく憶えておらず、怜はしばらく間違った調律のまま弾いていた。

そして、弦が切れた時点で弾くことを断念したが、月に200円のおこづかいから100円ずつを3ヶ月貯金して、安物の弦を買って張り替え、そこからは弾くことに夢中になっていった。

ギターをくれた老人は、ジャズピアニストとしては非常に優秀なプレイヤーだった。彼は、ギターを手取り足取り教えてやることはできなかったが、この時代にはすでに中・上流階級が占有するジャンルとなりつつあった難解な現代ジャズの理論を、怜にみっちりと教え込んだ。

怜は、25歳になった現在は団地を離れ、多摩地域の安アパートで一人暮らしをしていた。

未だに音楽にうつつを抜かしていることをよく思っていない両親には会いづらいものの、その近所に今も暮らす三野には、時々会いに行っていた。

顔を合わせても特に話すことはなかったが、児童遊園でいっしょにジャムセッションをすることが多かった。

夜中のうちに、商店の壁面のコンセントから電源をこっそりと「拝借」し、その電力で、改造した古い一台のバッテリーアンプからエレキギターと旧式の電子ピアノの音をいっぺんに出力していた。

それはひどく歪んだ音で、お世辞にも美しいサウンドではなかった。しかし、それでも、お互いの演奏の内容が確認できればそれで充分だった。ふたりの頭の中では、それらの音がクリスタルのように澄み切った響きとして変換されていたのだから。

イエローアウルの脱退を告げられてから一週間。怜は久しぶりに三野といっしょに公園で、相も変わらず、100年も前に生まれた

古いジャズのスタンダードを演奏をしていた。

怜の現在愛用のギターは二代目、何年も貯金してやっと手に入れた、東南アジアの無名メーカー製、ストラトの安価なコピーモデルで、しかも中古だった。

1曲が終わって、三野はやや満足そうな顔をした。彼は、生涯でこの曲を何回演奏してきているのだろうか？

演奏後、普通の人間関係なら充分気まずくなるほどの沈黙が流れた。

その後、三野は言った。

「お前、もう手は大丈夫なのか？」

「もう2ヶ月近く休んでたから、大丈夫。それに、もうずっと弾き続けるかどうかもわからないし」

「なんで？」

「あのバンドを追いつかれた」

「そうか」

三野は理由を聞かなかった。バンド内でのいざこざなど、彼自身はあらゆるケースを今まで見てきているのかもしれない。

その一件で人間不信になりがちな状態だった怜は、三野のいつもの寡黙さを少し心地良くさえ感じた。

「今日は、人を呼んでるんだ」今度は怜から話した。

「誰？」

「いや、オレの演奏を見たいってコがいて」

「・・・あのコか？」三野が指差した。

公園の入り口の方に、黒のスーツを着た女性の姿が現れた。依緒だった。

「初めまして、木乃内と申します」依緒は駆け寄って来た。

「ほう、サトシの彼女か？ そんなの高校生の頃に見たキリだな」

「違うよ、レコード会社のマネージャーだって」怜は三野をさえぎ

るように言った。

「今日は演奏を見せてもらいに来ました」依緒は頭を下げた。

「でもこの状況じゃ、レコード会社の人が満足できるような演奏なんてできないぜ。こんなアンプで、ギターとピアノだけ。しかもひとりは落ちぶれた年寄りの演奏だし」三野が苦笑いしながら言った。

もし、怜がもう少し乗り気であれば、依緒にちゃんとした音で聴かせるために、奮発して練習スタジオの予約を入れたかもしれないかった。でも、今の怜には、もう一度聴きたい、という依緒への義理を果たす以上の気持ちはなかった。

「それでもいいんです」そんな怜の心情を知っているのかいないのか、依緒は期待の笑みを見せた。

「サトシには悪いが、ジャズの新人を探すなら、音大のジャズ科に通っているお坊っちゃんでも捕まえた方がずっというと思うがな。まあいい、やろう」

その言葉を言い終わらないうちに、三野は高速のイントロを弾き始めた。『There will never be another you』だった。

この曲は、スタンダードナンバーの中では、怜のお気に入り曲だった。しかし、いつもよりもテンポが速い。さっきまで怜の臆鞘炎を気づかっていたとは思えないほどの三野のアップテンポに、怜はついていくのがやっとだった。

ビーバップのオーソドックスなフレージングを丁寧にまとめてくる三野のアドリブに続いて、ソロのバトンが怜へアイコンタクトで渡された。

いつもなら、リラックスして演奏しているところだが、その時、怜にとってこの場が訳もなく特別なものに感じられて、手が震えた。二度とはやって来ない特別な瞬間。

オレは緊張しているのか？ 客が一人、あとはブランコとベンチしかないような公園で？

あのコが見ている、ということがそんなにも特別なことだろうか？

そして、フツと意識が遠ざかるような感覚が来た後、怜は、一瞬ごとに無限の選択肢が広がっていく、壮大な即興演奏の海の中にダイブしていった……。

演奏が終わった時、怜は半分夢から醒めたような感じだった。今が朝方なのか夕方なのか、一瞬わからなくなっていた。ところどころ思い出すのは、自分でも普段あまり演奏したことがないようなフレーズを弾いていた、ということだった。

「所々へんちくりんだったが、良い演奏だったな」三野が言った。ほめてくれるなんてめったにないことだった。

「あんまり弾いたことない感じのアドリブだったかな」怜がつぶやいた。

「練習せずにぶつつけでやったりすると、たまにそういうことがあるんだよな」

三野は、怜に何が起こったか、見抜いているようだった。

「でも、練習不足っていうのは、たいていの場合は、悪い結果しか生まないけどな」

（あのコは……木乃内さんは、この演奏をどう思っただろう？）

依緒は、演奏に聴き入っていた、公園のブランコを一生懸命漕ぎながら。

「すっごい！すばらしい！やったあ！」依緒が高く評価しているのは、演奏の方なのか、ブランコの方なのかは、にわかには判別しにくかったが、常軌を逸した喜び方であることは間違いなかった。

そして、大きく揺れたブランコの高い位置から勢いよく飛び降り

ると、依緒は満面の笑みで怜に近寄って行っただ。

「霜井さん、音楽をやり直しましょう。バンドでやるなら、メンバー探しも手伝いますから」

「今の演奏で、何かわかったの？ 普通のジャズのスタンダードだよ」怜は彼女の喜びようについていけなかった。

「はい、もうよくわかりました。私は、演奏のジャンルとか、形式とかは気にしてませんから」

「じゃあ、何を気にしているの？」

「その、向こう側にあるもの、ですよ！」

怜は依緒の、発声だけが明瞭で、意味は不明の返答に言葉を失った。が、ここはどうしてもお互いに納得しなければいけないところ、引き下がってはいけない、と感じた。

「だって、イエローアウルの曲はみんな津山の作曲なんだよ？ オレには今、何も残ってないんだよ？」

「霜井さんは、すぐに作曲を始めて下さい。バンドの編曲ができるんだから、作曲もできるはずですよ」

歌手ならともかく、持ち曲が一曲もないアーティストと交渉するレコード会社なんて、聞いたことがない、怜は、それ以上はあきれ何とも言えなかった。

「やりますよね？ 新しい音楽を」

「わかった、やるよ」怜はつい、そう返事をしてしまった。

しかし、アイオンレコードと契約する、とは言っていないかった。あまりに簡単に怜の才能を過大評価しようとする依緒、怜にはそこには何か怪しい理由があるように思えて仕方がなかったのだ。

（依緒は、オレを利用することで、何の得があるのだろうか？）

三野と依緒は、並んでベンチに座っていた。そして今度は、怜の方がひとりでブランコを漕いでいた。

「怜は、下層にしちゃ、今どき変わったタイプの若者だと思うよ、

才能があるかどうかはわからないがな」三野はタバコを吹かしながら言った。

「あいつはガキの頃から、オレたちスラムの年寄りミュージシャンどもから、いろいろ教え込まれてるからな。上流も下層もみんな分け隔てなく、いろんな音楽を聴いていた時代の知識をよ」

依緒は黙って相づちを打っていた。

「まあ、今はそんな時代遅れかもしれないけどな。

だって、今はロックにしたって、クラブDJにしたって、やっている子どもはほとんど、音楽好きの親の英才教育でやってる、中流以上のコたちばかりだろ？」

下層のコたちは、そんなハイクラスの音楽が自分らにもできるなんて思ってたねえって。スポーツにしても何にしても、根気よく練習する忍耐ってのがないし、楽器に触れるチャンスすらなくなっちゃまっている。

それで、なんでも面倒臭がつて、手っ取り早く気持ちよくなりたことから、悪い大人にダメされてクスリとかキメたり、くだらないことばかりやってんだよ……」

三野は我に返ったようになって、苦笑いした。

「悪い、ついしゃべり過ぎたな。年寄りの悪いクセだよ」

依緒は、真剣な表情で言った。

「いえ、よくわかります。私たちもそれを少しでもよくしたいって思ってますから……」

一方、怜はブランコに揺れながら、冬を迎え、葉を落とした遊園の木々を眺めていた。

すると、彼の頭の中に、聴いたこともないような、短かいメロディが流れ出した。

やがてそのメロディは、繰り返しながら対旋律を派生させ、より長いパターンに展開していった。

これは、怜がギターを弾き始めるずっと前の、小さい頃からやつ

ていた、彼の退屈しのぎの一人遊びだった。お金もかからず、友達も必要なく、時間の限り続けられる一人遊び。しかし、つくったメロディは、そこから気持ち離れてしばらくすれば、すっかり忘れてしまうことがほとんどだった。

そうやってできたメロディを、記録しておく価値のあるものとは、考えたことがなかった。

「オレが作曲か……」怜は、空を仰ぎながらブランコを漕ぎ続けた。

三野と別れた怜は、今回は依緒の車で自宅アパートまで送ってもらうことにした。

依緒の車はドイツ製の高級車だった。怜はもちろん、こんな車に乗るのは初めてだった。

（もともと資産家の令嬢なんだろうか、それとも、アイオンレコードというのはそんなにはぶりがいい会社なんだろうか？ 所属しているアーティストの傾向や知名度を考えれば、とてもそんな風には思えない）

怜の疑問は深まるばかりだった。

「木乃内さん……」

「今度から、依緒、って呼んでいいよ」依緒はにこやかだった。

しかし、怜とは温度差があった。

怜は、右側の助手席という、初めて座る位置からの街の風景に目をやったまま、依緒に鋭く質問した。

「オレみたいな、普通の、ごく平凡なアマチュアのギター弾きを相手にして、いったい何の得があるんだ？ 他にもっとカッコよくて才能がある奴なら、この東京にいくらでもいそっじゃないか。オレに目をつけた本当の理由は何なんだ？」

「だから、霜井クンのギターは個性的だし、すごく……」依緒は微笑んだまま言った。

「そうじゃなくて！」怜は声を荒げた。

「今まで6年間バンドやって、よそのバンドのうわさをいろいろ聞いてきているんだ。レコード会社から契約を持ちかけられた奴らの話をね。」

例えば、すぐにデビューさせる、って口だけうまいこと言われて、バンドのメンバーから法外なレッスン料やレコーディング代を負担させられて、払うだけ払ったら、たいした世話もせずに放っておかれる、とか、そういう話だよ」

「・・・そう、それは気の毒だね」依緒は低い声で言った。「それで、アイオンレコードも、そういう人たちと同類だって言うの？でも・・・」

依緒は一瞬、言葉をためらった。

「でもあなた、下層、なんでしょ？」彼女も運転で正面を向いたままだった。

「霜井クンは、ある時は貧しい自分を卑下しておいて、そのくせ、ある時は自分にお金目当てで寄ってくる人間がいるなんて思ってるの？それって何か変じゃない？」

これには怜はグーの音も出なかった。まったく依緒の言う通りだ、と思った。金銭トラブルに引っかかっているバンドは、みんな中流・上流の出身だった。

それから、車が怜のアパートに着くまで、お互い口を利くことはなかった。

怜の住まいは、木造の老朽化したボロアパートだった。

怜の二階の部屋のドアを叩くノックの音が、アパート正面に停めた車から降りた時点で、外に響いていた。

怜はあわててきしむ階段を上って行くと、そこにはアパートの大家の中年女性がいた。

「なんだ、居留守じゃなかったのね」大家は怜に気づいた。

「あんだ、いい加減、家賃を払ってちょうだい！ 三ヶ月の滞納はほんと困るから！」

「すいません……」 怜はそれ以上何も言えなかった。

大家は怜の肩越しに視線を移した。「あんだね、ギターなんかできる余裕があるなら、支払いできるでしょ？」

そして、怜の肩のボロボロのギターケースに手をかけた。「どうしても払えないなら、これ、預かってくよ。近所の質屋でいくらにはなるでしょ」

「いや、待って下さい」 怜は弱気な声とともに引き下がった。

「こつちだつてあんだみたいな輩はいっぱい見て来てるから、家賃払わないのに対処する方法は心得てるんだよ。甘く見られたら困るよ」 大家が睨みつけた。

確かに大家は今まで、金にルーズな者やヤクザ者たちをたくさん相手にしながら、このアパートの管理をやってきていた。夜逃げされて滞納金を踏み倒されたことも度々だった。そうした経験から、年を追うごとに、支払いが遅れる者への態度は容赦がなくなっていたようだった。

「それに触らないで！」 廊下全体に共鳴するような絶叫が響いた。 怜はもう帰ったと思っていた依緒が、そこにいた。

第4章

車でもう帰ったと思っていた依緒が、そこにいた。

「それに触らないで、って言ってるの！ わかるでしょ？ 触るな
って！」

依緒の細いノドから振り絞られる動物的な威嚇の声は、滑稽なく
らいの不慣れさが、かえってその覚悟の深さをうかがわた。

大家が、本気でギターをその場で取り上げるつもりだったかどう
かは、怜にもわからなかった。その時点では、単なる脅しである可
能性の方が高かっただろう。

しかし、依緒の怒り方は普通ではなかった。怜は、依緒のなりふ
り構わない叫びに驚いたが、彼女の声は、怜の心を代弁してくれて
いるようでもあった。

怜にとって、ギターというものがどれほど大切か、その依緒の震
えたハイトーンが物語っているかのようだった。

（でも本当は、彼女にとってはそれ以上の意味があるのかもしれない）

怜には一瞬、そんな風にも思えた。

「あんだ、誰？ じゃあどうにかしてくれるの？」 大家も少なから
ず、その声にくじかれたようだった。

「・・・いくらですか？」 依緒は早くも落ち着きを取り戻してい
た。

「三ヶ月で9万6千円よ」

「口座番号は？」 携帯を取り出した依緒の声はさらにそっけなかつ
た。

「MSネット銀行、普通046・・・」 大家も、依緒の意図を理
解して、ゆっくりとした口調になった。

依緒は言われた番号を携帯に打っていった。

「しばらくしたら、確認して下さい。今、振り込みましたから、20万」

「いや、家賃は9万・・・」

「向こう3ヶ月分もまとめてお支払いしました。端数はお詫びのつもりです」

依緒は、怜に部屋に入るように目で促した。そして、ドアを開けて中に入る怜の背中を押して、自分も後に続いた。

「お嬢さん、払ってもらってる私が言うことじゃないけどね、そんな男・・・」部屋に入っていくふたりを眺めながら、大家在諭するように言った。

何が言いたいのかを察した依緒は、「お世話様です」というと、速やかにドアを閉めた。

「ごめん、必ず返すから・・・」怜の自尊心は打ちのめされていた。

元々、メジャーデビューを目指すイエローアウルのために、活動費用がかかっていたところへ、腱鞘炎のためにバイトを辞めざるを得なくなり、治療費もかさむなど、怜は経済的に追いつめられていたのだ。

しかし、そんな言い訳を口にする気力すら、彼には残っていなかった。情い思いでいっぱいだった。

「大丈夫よ」依緒は、うつむいたままの怜にあつさりと言った。

「モーツァルトやシューベルトなんて、もっと酷かった・・・らしいから」依緒のその言葉は、怜には聞き流されていた。

怜の部屋は、片付いているというよりは、物がなくて殺風景な4畳半の1Kだった。

あるのは、テーブル、棚、スタンドに寄りかかった1本のエレキギター、冷蔵庫と同じくらいの大きさの改造されたギターアンプ。

そして、流行りの60年代モッズ風のスーツが壁にかかっていた。イエローアウルのライブでの激しい動きと汗に耐えてきた、一張羅だった。

「霜井さん、こういうかたちで話を進めるのはイヤだったんだけど・・・アイオンレコードと契約して下さい」依緒は事務的な声で告げた。

「さっきのお金はもちろん、私のお金じゃなくて、アイオンのお金なの。アーティストへの資金援助は、うちの会社では、最初から契約書にも盛り込まれている内容なのよ」

「えっ？」

「ほら、ここに書いてあるでしょ」依緒は、カバンに入れていた契約書を取り出し、ある条項を指差した。

「つまり、さっきの家賃は、うちと契約して、出世払いで返して下さい」

こうして怜は、自宅の粗末なテーブルの上で、アイオンレコードの契約書にサインすることになった。

（特別な才能もなく、持ち曲すらないアーティストに、最初からお金を貸すことを見越して契約するレコード会社。そんなお人好しな会社が、この世にあっていいのだろうか？

彼らの本当の狙いは何なのか？）

彼女は、契約書の内容をひとつずつ読み上げ、難しいそうな条項については噛み砕いて怜に説明した。確かに、極端に不利益だとか、怪しいと感ぜられる項目はない。

基本的には成功報酬が、ライブでの演奏や、制作したアルバムの上り上げに応じて、怜に支払われる、ということだった。

それでも怜から、疑念が完全に晴れることはなかった。

しかし、契約したことによって、怜にある種の責任感が芽生えたことは確かだった。

彼は、依緒が契約書を抱えて帰ったその日のうちから、自宅の三世代前の旧式パソコンの作曲ソフトで、デモの制作を開始した。

今まで貧しさゆえに、他に趣味や娯楽も持たず、ヒマさえあればずっとギターの練習をすることが当たり前だった怜。バイトなど他の用事がない日は、一日六時間練習することはザラだった。

しかし、腱鞘炎がひどくなるのを防ぐためにも、練習の時間を三分の一下に抑え、その分、作曲に時間を使うようになった。

極力手に負担のかからないようにギターを調整し、今までより細い弦を使うようにした。アスリートさながらに、力を抜いた演奏フォームの改造に取り組んだ。そして炎症の回復のために、貧しい食生活ながら栄養にも気を使い、再起へ向かって細心の注意を払った。怜は、経済的にも、これ以上依緒に迷惑をかけて情けない思いをするのはイヤだった。新しいバイトも探さなくてはならない。とても忙しい毎日となった。

アイオンレコードがどんな連中なのか、あれこれ詮索している場合ではない。早く自分をイエローアウルから切り離し、契約アーティストとして、人前で披露できる音楽を生み出したい、その一心だった。

そして、依緒を喜ばせる曲をつくりたい、という気持ちが、その信念の中核に芽生えつつあった。

怜に芽生えたその気持ちに、依緒は毎日欠かさず水を注いでいた。依緒は、アイオンレコードの海外契約アーティスト、トライバル・ユニット「ボクシン」と即興演奏する人工知能「ルディ」のアルバムの、プロモーションの仕事に追われていた。が、その合間を縫っ

て、怜にはマメに連絡を入れていた。

彼女の声が、怜の創作意欲を刺激し、励みとなった。

「もうこれからは、流行に左右されないで」

「自分の内側から湧き出てくるものをつかまえて」

それが、怜と会話する度ごとの、依緒の口ぐせのようになっていたアドバイスだった。

イエローアウルでは、流行の1960年代リバイバルのサウンドを意識していた。

メジャーデビューを目標とした、イエローアウルでの6年間の活動の中で怜は、自分のやりたいことと、流行が求めていることの区別がなくなっていた。それは幸せな状態だったのかもしれない。

（でも、それが本当にオレのやりたいこと、オレのやるべき音楽なんだろうか？）

生まれてきたこの新たな葛藤の中で、彼の新しい音楽のエネルギーが渦巻き始めていた。

怜がやりたかったのは、今までの彼のすべての経験が、正直に凝縮された音楽だった。

スラムで体験したあらゆる出来事。三野から学んだ古いジャズ。

そして、津山たち中流階級と背伸びして関わりながら吸収したロック。それらの融合だった。

例えるなら、1960年代後半から70年代初頭の時代の前衛的ロック。

ロック音楽がビッグビジネスと結びつく前の時代には、クラシックやジャズにも負けない知性と創造性を獲得するために、真のアーティストたちは実験を繰り返した。

そして、その実験精神をレコード会社も率先して支援した、そん

な理想的ながらも、はかなく短い時代のロックだ。

その時代のスタイルをまねる、ということではなかった。それでは結局、現状の懐古趣味のループへと舞い戻ってしまう。その精神を受け継いだ、21世紀にふさわしいサウンドをつくりたかったのだ。

怜の構想は固まっていた。

（そして伝えたいことは、言葉を超えた何かだ。だから、ボーカルは必要ない）

「怜クンの曲は、ギター、ピアノ、ベースとドラムの4人でできるんだね？」

依緒は、この日は自宅へ訪ねてきて、怜が作曲したデモを聴いていた。いつしか、怜を霜井さんでなく、怜君と呼ぶようになっていた。

「それなら、ギター以外のメンバーを探さないかね」

「オレも、ツテのあるところにはみんな相談したし、ネットで募集もかけてるけど、なかなか腕の立つ奴は見つからないね」

怜は、ネットの募集掲示板をスクロールしていた。

「大丈夫、私たちも探しているから」

依緒は自信ありげに言った。

それから一週間後、作曲に打ち込む怜の携帯に、依緒の着信が入った。

「怜クン、今大丈夫？」

「あ、うん」

「そこから歩いて20分くらいの距離なんだけど、来てもらえない

かな？ 手伝ってほしいことがあるんだよね、今から場所を教えるから」

こう言うとき、いつも彼女の話には言葉が足りない、と怜は思った。

「何をやるの？」

「大掃除！」依緒は叫んだ。「今まで経験したことのないくらいの、すごい掃除！」

そこはゴミの山だった。二部屋ある、怜の部屋よりは広めのアパート、その床全体を覆い尽くす空の缶、ペットボトル、ビニール袋、プラスチックの破片や、その他訳のわからないもの。それらが異臭とともに強烈な忌まわしさを醸し出していた。

その部屋の奥の角には、黒い練習用ドラムのセットがあった。その周辺だけはゴミがなく、いつでも使えるようになっていたようにだった。

そして、その椅子には、Ｔシャツに短パン姿の、小柄な肥満体の若者が座っていた。

「私一人で、今日一日でなんとかなるかと思って、午前中から始めたんだけど、もうひとりいないとダメだって、お昼過ぎに気づいたの。もう明日になったら、私もやる気ないと思うから、どうしても今日中に終わらせたいのよ」なぜか依緒の声は快活だった。「怜くんごめん、もうこっちのゴミ袋がいっぱいだから、そこの新しいの取ってくれる？」

日が暮れる頃には、片付けは完全ではないものの、広い方の部屋になんとか三人が座れるくらいのスペースをつくることができた。

「だいぶ遅くなったけど、紹介するね。彼は、阪元荘太くん。今２８歳だっけ？ 怜クンのバンドの、ドラムをお願いしようと思って」

「彼に？」 怜はあからさまに渋い顔をしてしまった。

「うん。それで、私もこんなに汚い部屋みせられたら、どうしても放っておけなかったから」

莊太は何も言わなかった。

「何か、叩いてみてよ、すごい」

莊太は黙って、短パンからむき出した、あぐらをかいた太い足の両膝を、両手で同時にペチペチと叩き始めた。それは、非常に正確な一定のテンポだったが、ことさら驚くものではなかった。

やがて、左手が2回叩いている間に、右手が3回叩くようになって。8分音符と3連符の関係である。

それが途中から急に早くなり、左右の音のタイミングがバラけた不調和なリズムになった。が、よく聴くと、一拍で左手が3回叩いている間に、右手が4回叩いているのだった。

さらに、左手が4回叩く間に、右手が5回、というのもやってくれたようだったが、怜にはまったく訳のわからないものに聴こえた。「ねえーすごいでしょ？」 依緒はうれしそうに、怜に同意を求めた。「うん……」 怜は返事に困った。

（確かに常人にできることではないが、それはバンドで良い演奏ができることとは別問題だ。それにバンドではコミュニケーションや協調性だって必要だ。自分の部屋の掃除にも参加しない彼とは、うまくやっていけるんだろうか？）

「バンドの経験はあるの？」 怜の方から質問した。

「……中学で、プラスバンドにいて……」 莊太は初めて口を利いた。

「それ以外は、特にないらしいの」 依緒は補足した。「なんていうの？ 登校拒否っていうのかな、それから、あまり表では活動していないんだよね」

いわゆる引きこもりだったのだ。彼の家族はどうしているのか、

怜は聞きたかったが、カンのようなものが働いて、それは後から依緒に聞くべきだと判断した。

「今日はありがとうね。突然呼び出して」

依緒は、いっしょに荘太のアパートを出た怜に、礼を言った。
外は夕方になっていた。

「いや、いいよ。オレのバンドのためにやってってくれてることですよ、みんな」怜は初めてゴミの山を見た瞬間を思い出して吹き出した。

「でも、彼は本当に大丈夫なのか？」

「大丈夫。ドラムの腕は確かだと思うし、悪い人じゃないよ」

怜は、訊きたかったことを思い出した。「彼、家族は？」

「二年前、両親とも交通事故で亡くなったらしいの。それまで十代からずっと引きこもっていたから、家のことも仕事も何もできないで、今は貯金を食いつぶしている状態みたい」依緒は淡々と話した。
「そもそも依緒は、そうやって家に閉じこもっているアイツと、どういうきっかけで知り合ったんだよ？」

「へへへっ、確かにそれ不思議だよねえ」

依緒はおどけて見せて、それ以上は何も答えなかった。

第5章

怜がベーシストを紹介されたのは、ドラムの阪元と出会ってから2週間後だった。

怜は、アイオンレコードから、来日していた即興演奏アプリケーション「ルディ」と、その開発者ジェフ・ラビンのコンサートに招待された。

彼らは、アイオンレコードのメンフィス支部の契約アーティストである。

コンサートは、グランドピアノと連動したルディの無伴奏ソロ、ジャズ・ミュージシャンとのセッション、そして開発者のジェフとのピアノ連弾などによって構成されていた。

ルディは、機械の演奏とは思えないほどに歌心があり、即興のボキャブラリーも豊富で、他のミュージシャンの音によく反応し、音でコミュニケーションしながら素晴らしい音楽をつくりあげていた。

ジェフとの連弾では、ピアニストとしてはつたないジェフの演奏をフォローするような場面もあった。

「ルディにはね、血は通っていないけど、ジェフの魂がこもっていると思う。このコンサートを聴きもしないうちから批判する人はたくさんいたけど」

上演終了後、依緒が、隣の座席の怜に言った。

「それから、ジェフ自身の演奏も好きなの、確かに上手じゃないけどね」

依緒と怜は、ジェフ・ラビンのいる楽屋を訪ねていった。

ジェフは、怜より年下らしかった。度の厚いメガネをかけたひよろつとした若者で、実際の年齢より上に見える風貌だった。依緒と怜を見ると、気さくにあいさつしてきた。

彼は現在、アメリカ最高の人工知能研究所の研究員でもあるのだ。ジェフと、英語がしゃべれない怜は、依緒の通訳を介して互いに自己紹介をした。

怜は、人見知りもあつてたいした会話をすることができなかったが、ジェフから、いつかルディと共演してほしい、と言われ、恐縮しながらも内心、奮い立つものがあつた。

そしてそこへ、初老の男と、二十代の若い男の、長身の二人組が近づいてきた。

白髪の男は、フォーマルな茶のスーツで、強い威厳を感じさせる人物だった。

若い方は、細身の黒スーツをかなり着崩し、ブレスレットやイヤリングなど、鋭角的な銀のアクセサリーを合わせていて、いかにもミュージシャンらしかった。髪は黒だが、光に反射したところが薄い水色に見えるように染めていた。

ふたりとも、遠くから見ても只ならぬ存在感があり、周囲の関係者たちの多くが彼らの方を振り向いた。

「紹介するね」依緒が間に入った。「こちらはアイオンレコード東京の代表、秋佳です。そしてこちらは、怜クンのバンドでベースを弾いてもらう予定の、多川くん！」

「多川……？」

怜はすぐに思い出した。2、3年前にメジャーデビューしたバンド「マスターフェイス」の元ベーシスト・多川鋼だった。

怜は、マスターフェイスのことをファンと言えるほど詳しいわけではなかったが、多川は、インディーズ時代から凄腕ベーシストとして知る人ぞ知る存在だったことは、怜もよく知っていた。

「マスターフェイスの……ですよね？」

「はじめまして」多川は、うなずくように礼をしてくれたが、そのバンドの名前には反応しなかった。

（きつと、脱退したバンドのことは思い出たくないのか、もう自分と結びつけて考えてほしくないんだろう）

怜もバンドのレベルは違うが、同じような経験をしているだけに、そこはわかるような気がした。

「こちらもしじめまして。怜君」秋佳が低い声で言った。「依緒から、いろいろ話を聞いているよ。うちの所属アーティストなのに、代表として、今まで会う機会がとれなくて申し訳なかった。少し前まで、海外にいたのでな」

怜は、秋佳が差し出した手と握手を交わした。

「これからジェフ達との付き合いがあるので、私はあと少しで行かなければいけないんだが、今後の怜君の活動について、手短に話をさせてくれ。」

もう怜君は何曲か書き上げてくれているようなので、それを来月、ライブハウスのブックキングのショーケースで、4人編成バンドの私たちでお披露目してほしい」

「来月、ですか？　それで、4人、っていうのは？」

「ああ、申し訳ないが、バンドのメンバーの人数はすべてこちらに任せてくれ。腕の立つ人間を集めたいんだ。」

本番前に一度リハーサルをやるだろう。その時までにもう一人、キーボードが弾けるのを連れてくる。私の方のツテで探してきた。彼女は他の演奏の仕事がすごく忙しいコだから、日程を合わせるのが難しい。正式メンバーではなく、しばらくはセッションマンとしての参加になると思う」

キーボーディストが女のコであることと、この人物からだいぶ実力を買われている、ということは、怜にもわかった。

しかし、これだけ実力者をそろえてくれたのはいいが、肝心の自

分の曲と演奏の腕前は、評価されなくてもいいのだろうか？

「あの・・・僕の曲については・・・」

「日程とか、あとの詳しいことはみんな依緒に任せてあるから、心配はしてない。じゃあ、そろそろジェフと行かなきゃいけないから、そっちもライブ当日は観に行くので、楽しみにしているよ」

と言うと、秋佳はさっさと行ってしまった。

アイオンレコードという無名の会社、最初はどこか怪しいと思っていた怜だったが、ここへ来て、知られざる強者を発掘する、その人脈に驚かされるばかりだった。自分の実力が、彼らとの比較に耐えうるものなのか、かなり心配になるほどだった。

「ルデイ」のコンサートの日以来、急に高まってきた怜のプレッシャー。それにともなって、作曲のペースも落ちてきてしまった。

怜は、自宅アパートで、進まない作曲作業に悶々としていた。

発想が思い浮かぶままに、夢中になってやっていているうちはよかった。しかし、ライブの日程が決まり、たくさんの人が聴きに來てくれることを考えると、迷いが生じてくる。

何を聴かせても喜んでくれる依緒の態度に、すっかり甘えた状態になってしまっていた自分を恥ずかしくも思った。

リハーサルの日まで一週間となり、書くべき曲数が残り一曲となったところで、まったく作業が進まなくなってきた。

ブラームスの交響曲第4番・第一楽章の悲壮なメロディが、冬の朝の冷気のように、怜の全身を包み込んだ。

その日は、プロの交響楽団のコンサートを聴きに來ていた。

もちろん、怜が自分から聴こうと思う音楽ではないし、まして普

通にチケットを買って観る金銭的な余裕もなかった。おそらくこの会場にいる人間の中で、下層階級の人間は、怜ひとりだけだろう、ということが、彼には気にならないではなかった。

しかし、そんな雑念が意識の外からすぐに追い出されるくらいに、怜はこの荘厳な音世界に没入していった。

ブラームスは生前、自分は靈感によって作曲している、ということとを告白していたらしい。そして、後世に残る価値のある音楽は、みな靈感に基づいてつくられている、と。

怜は、自分が時々見るオーケストラ、のようなもの、の夢を思い出した。

（自分程度のレベルのミュージシャンが観る夢が、ブラームスの言うところの靈感に当たるものなのかどうか、それは疑わしい。

しかし仮に、その夢が充分に価値のあるものだったとしても、それをこの現実世界に引っ張り出してくる力が自分にはない。ましてそれを、みんなに感動を与えられるレベルで表現するなど……。

）

このコンサートのチケットは、旧友がくれたものだった。その旧友は、このオーケストラの中で、クラリネットを吹いている、西沢だった。

上演後、怜は西沢と会うことができた。

ホールの廊下のベンチで、怜は西沢からおごってもらった自販機のコーヒーを飲んだ。

西沢は、10代の頃、ジャズのサクソプレイヤーを目指していた。そして、ライブハウスのセッションで演奏する他、三野をはじめとしたスラムのミュージシャンとも交流していた。

普通、上流階級が自ら進んでスラムに入っていくことなどめつたになかったが、彼はブラックミュージックの歴史などを知るうちに、自分も日本のスラムの文化から何か学びたい、という物好きな気持ち芽生えたようだった。

そんな中で、怜は三野を介して西沢と知り合った。怜にとって西沢は、下層を差別しないで接してくれる、唯一の上流の同世代であり、ふたりはすぐに友達になった。

その後、西沢は親の希望でクラシックの音大に進学し、それからジャズを離れていたが、時々連絡は取り合う仲だった。

「久しぶりだな。新しいバンドを始めるって前聞いたけど、がんばってるのか？」

「うん、まあね。いろいろ決まったら、またメールするよ」

バンドはまだ、西沢に胸を張って説明できる状況ではない、と怜は思った。

「メンバー探ししてるらしいけど、協力できなくてゴメンな。もうロックとかやってる知り合いはいなくなってるから」西沢は謝った。「いいんだ。所属してるレコード会社が紹介してくれて、メンツは固まりそうなんだ」

「えっ、そうなのか？ いいところだな、なんて会社？」

「アイオンレコード。知られてない会社だけど」

「アイオン？ 聞いたことないな、どこにある会社だ？」

怜はアイオンレコードの事務所に行ったことはなかった。西沢の質問に答えられないのを恥ずかしく思いながら、彼は依緒の名刺を出して、所在を確認しようとした。

「えっ、まさか？」

名刺を見た西沢が驚いたのは、渋谷区の住所の方ではなく、名刺の氏名の方だった。

「木乃内依緒って、木乃内勇のお姉さんだろ？」

「えっ、知ってるのか？」怜は驚いた。

「ふたりとも、オレと同じ音大の出身だよ。お姉さんは中退したらしいけど、弟は同級生だよ」

「そうだったんだ……」

「木乃内勇は友達付き合いはなかったけど、すごく優秀で、学内では有名なピアニストだった。今は木乃内楽器のデモンストレーターをやってるはずだよ」

「デモンストレーター？」

「会社の製品の楽器をデモ演奏して紹介する仕事だよ。普通は地方の楽器屋を回るような仕事なんだけど、あいつはコンサートピアニストに負けないくらいの技術があつて、ルックスもいいから、半ばアイドル的な扱いされてるよ。」

その上、木乃内楽器の社長の子どもだもんな」

「……っていうことは、依緒、の方も？」

怜は、木乃内楽器を聞いたことはあつたが、彼女の名前と結びつけるところまでは考えが至らなかった。

「そうだよ。彼女は学年が違ったし、作曲科だったから、ウワサを聞くだけでほんとかどうかよくわからないけど、お姉さんの方はだいたい変人扱いされてたぜ」

「変人……」怜は、その語に突き刺さるような痛みを感じた。

「ああ、話によると、時々意味不明なことを叫んだり、奇行が目立つたらしいな。新興宗教にハマってるだとか、どこかの年寄りの愛人になってるだとか、いろいろ言われてたらしい。あくまでウワサだけだな」

「……」

「信用できる奴の話だと、未来を読んだり、人の心を読んだりしてるとしか思えないようなおかしい言動がいつもあつて、それが原因で友達をなくすことが多かった、とか」

怜はその話を聞きながら、なんだか自分の恥ずかしいところを暴露されているかのような、なんとも言えない屈辱感を感じていた。

しかし、西沢が知っている依緒のことは、知れるだけすべて知っておきたいという気持ちもまた、同時にあった。

「他には？ 依緒のことで」

「他に？ うーん、中退した後は海外に行った、らしいとか……もう何年も前のウワサ話なんでよく思い出せないが……」西沢は首をひねった。

「そうか、ありがとう……」

依緒の意外な過去を知った怜は、少なからずショックを受けていた。

「悪いことは言わない、その姉さんの方には近づかない方がいいと思う。レコード会社からデビューの話をもちかけられて、ひどい目にあってる奴の話は、今までたくさん聞いているだらうけど、このアイコンっていう所も、ちょっと怪しい気がするぞ。」

そういう会社とは、確かに何か違うが……もしかしたらカルトか何かと関係があるのかもしれない。しばらく様子を見るにしても、充分注意した方がいいぞ」

「うん、わかった。気をつける……」怜はうなだれるように、うなずいた。

西沢は、自分を心配して言ってくれているのだ……怜は、自分の中からわき上がる強い苛立ちと失望感を、西沢のせいになじないように自分を制した。

「じゃあ、オレ、もう行かなきゃいけないから。また連絡するね」

西沢は腕時計を気にすると、ベンチからゆっくりと立ち上がり、怜に手を振った。

「おう」

別れ際、笑顔をつくった怜は、しばらくひとりでベンチに残っていた。

第6章

リハーサルの日。

依緒は都内のアマチュア用の練習スタジオに、予約を午後6時から9時まで3時間とっていた。怜はそこへ1時間前に、一番早く来ていた。

時間の10分前、スタジオのスタッフが、前の時間に予約が入っていないから、と部屋に入れてくれた。

それとほぼ同時に来たのが、ベースの多川鋼だった。

彼はインディーズシーンでは半ば伝説化した存在と言ってもいい達人だけに、やはりそのオーラは並々ならぬものがあつた。

「おはよう、今日はよろしく」鋼は防音の分厚いドアを開けて部屋に入ってきた。

「よろしくお願いします」鋼の年齢は年下かもしれないが、敬語を使わざるを得ない、そんな雰囲気だった。

「君はなかなか面白い曲を書くよね。今日は楽しみにしてるよ」

「は、はい。どうも」

「どんなギター使ってるの？ 見せてよ」

鋼は壁に立てかけてあつた怜のギターケースを手にとると、中のギターを取り出した。

東南アジアの無名メーカーがアメリカの老舗ブランドに似せてつくった安物ギターだった。

「ストラトのコピーモデルか。使い込んでるからか、鳴りがいいな」鋼はすさまじいばかりの速く正確な運指で、指板の端から端まで縦横無尽に弾きまくった。そのテクニクは、怜のそれを軽く凌駕していた。

「す、すごいね」怜は、発する声が裏返りそうなほどの衝撃を受けていた。

「ギターもそんなにうまく弾けるのに、どうしてベースを？」

「ベースはね」怜のギターを彼に渡すと、今度は自分のケースから楽器を取り出した。木乃内楽器のオーダーメイド・ブランド『ドラゴンズロアー』製の、高級感あふれる紫の光沢を放つ6弦フレットレス・ベースだった。

「ベースは、楽器の音を星に例えると、太陽なんだよ。それで、他の楽器は、その周りをぐるぐる回っている惑星なんだ。それでオレは、バンドの中心にいるベースが好きなんだな」

そんなロマンチックな例え話も似合ってしまうところが、鋼にはあった。

フレットレス・ベースは、ヴァイオリンのように、音程を決める金属のフレットが打ち込んでいないため、フレットがあるものより運指の正確さが要求される。しかし彼はそれを歌心たっぷりに弾いて見せた。

依緒と荘太は、時間ギリギリに現れた。

「放っておくと心配だったから、荘太君といっしょに車で来たの」依緒は遅かったことを詫びた。

「キーボードの絵美ちゃんは、もうちょっと遅れてくるから、先にやってて」

そういうと依緒は、絵美と待ち合わせ場所にいる駅前へと、再び出ていった。

荘太は、ドラムの椅子に座ると、意外なほどときばきと、自宅から持って来たスネアドラムをセットし、チューニングし、キットの各楽器の位置を調整し始めた。

そして、いきなり暴風雨のように激しいシングルストロークでウーミングアップすると、シンバル・スタンドを倒さんばかりの勢いで、ドラムソロをやってみせた。

一同は唖然とした。

荘太はあまり表情を変えなかったが、彼が興奮気味であることは、ドラムの音が物語っていた。

「ほー」鋼はうれしそうに笑った。「面白いバンドになりそうだな」

「じゃあ、準備が良ければ、1曲ずつ通していこう」怜がみんなをまとめた。

怜の曲は、ジャズとロックの両方のバックグラウンドを持つ怜らしい、パワフルで創造性に満ちたインストウルメンタルだった。

怜は、依緒からのアドバイス通り、各楽器が演奏しやすいかどうか、ということをはとんど考えず、彼の心のおもむくままに作曲した。

そのため、非常に難度の高い曲が多く生まれたが、鋼と莊太はそれをものともせず弾きこなしてしまった。

鋼のベースは、堅実な低音で、メロディアスにバンドを支え、キーボードが不在の和声の乏しさを充分に補う働きをした。

莊太のドラムは、打点が線や面を描くような豊かなダイナミクスで、バンドの心臓を鼓動させていった。

そして、怜のギターは、強烈なノイズと美旋律が一体となった、呪術的な響きすらする鬼気迫るサウンドを放出した。

怜の足下には、ギターとアンプをつなぐケーブルに中継された、ペダル型の機械エフェクターがあった。それは、とあるスラムの住人がつくってくれた自作の『ファズ』で、それが怜の個性的なサウンドの一要素にもなっていた。

イエローアウルに加入した頃、三野の知り合いだった元オーディオマニアが、電気工作の特技を生かして怜にプレゼントしてくれたものだ。そのファズがつくり出す、伸びのある歪んだ音を、怜はとても気に入る、ずっと愛用していたのだった。

演奏自体は、鋼と莊太の演奏の正確さに比べると、荒削りな部分もあったが、彼の作曲、即興の能力は、メンバー達に大きな可能性

を感じさせるに充分なものだった。

「お待たせしました、絵美ちゃんが来ましたー！」

演奏が一通り終わったところで、迎えに行っていた依緒が、小柄な女のコといっしょに部屋に入ってきた。

「前の仕事が押しちゃって、ゴメンナサイ」そのコ、絵美は、入ってきた室内を明るくするような華やかさを持っていた。

絵美は、流行りの1960年代風なミニ丈のワンピース姿で、シヨートヘアからのぞいたティアドロップ型のピアスが大きく揺れていた。

「初めまして、よろしく願いしまーす」絵美はあいさつすると、背負ってきたキーボードをスタンドに乗せた。

絵美を含めた四人での演奏がはじまった。

絵美のプレイは、一人でオーケストラを演奏しているかのような重層的なサウンドで、怜、鋼、莊太の攻撃的な演奏を、多彩な音色で包み込んだ。

「最高、最高だよ！ 絵美ちゃんすごいよ！」依緒は興奮していた。「そう？ 実はデモも聴いている時間なくて、演奏も初見なんだけど。アレンジも適当だから、直すところあつたら言つて下さいね」絵美は怜を見て、平然と言った。

彼女のそのゆるぎない、計算し尽くされたプレイが、初見と即興によつて組み立てられたものだとはい、どうにも信じがたかった。どんな方法でどのくらい練習したら、そんなことが可能になるのか、彼には想像もつかなかった。

怜はメンバーの中でも特に、絵美の才能に魅了され、そして打ちのめされた。

怜にとってその日は、誇らしい一日となった。初めて自分で作曲した音楽が、現実になったのだ。

そして同時に、とてつもない才能に出会い、圧倒されることにもなった。イエローアウルで活動していた頃には見かけることがなかったような、桁違いの才能達だった。

リハーサルが終わると、5人は、ファーストフード店で打ち合わせをするようになった。

そこで決められたのはバンド名だった。候補はいくつも出たが、これといったものが見つからなかった。そこで唐突に、依緒は莊太に「好きな動物は？」と尋ね、「カエル」と答えたことから『フロッグス』に決定した。

怜は、「音楽を単なる楽音おたまじゃくしを超えて表現したい」という意味合いからも、とても良い名前だと感じた。

「これで来週のライブ、ますます楽しみになって来たね」依緒はにこやかだった。「ね！」彼女はテーブルの向かい側から怜の顔を覗き込んだ。

「あ、うん……」そのとき、西沢から聞いた、依緒についてのウワサ話のいくつか、一瞬怜の頭をよぎった。が、彼はすぐにそれを振り払った。

（もし本当に、彼女が学生の頃に変わり者だったとしても、それが何だというのか。

しかし、確かに依緒は、いつもの周囲の人たちのことを考えてくれているが、自分自身のことについては、あまり触れようとしない。

依緒自身のことについて、もっと知る必要があるだろう。

でもそれは、このライブが終わってからにしよう。今は、バンドの他のメンバーと、よく知り合うことの方が先決だ）

怜は我に返って言った。「うん、ほんとにすごい人たちが集まってくれたけど、自分がちつぽけに見えてきて、なんだか複雑な心境だよ。みんなはどうやってそのテクニクを身につけたの？」怜は、隣の席の絵美を見た。

「絵美さんは？」

「えっ、わたしはね、2歳からちょうど20年、ピアノをやっているから」

22歳……絵美は、怜の三つ下だった。

「それに……これを言うのと嫌われちゃうかもしれないけど、私、デザイナー・ベビーなんだ」

怜は、本物のデザイナー・ベビーに会ったのは初めてだった。

というより、それをカミングアウトする人に、初めて出会った、ということだった。

上流階級の1%くらいは、能力向上のために、胎児期に何らかの遺伝子操作を受けている、という統計があるらしい。それについては怜も聞いたことがあった。

「音楽好きの両親の希望で、特に音楽の才能が伸びるように、音感とか時間感覚がアップするようにしてくれてるの。それから、指も長くて器用になるように」

もしかしたら、絵美がここで自分の秘密を明かしたのは、決して自慢ではなく、自分を偽りたくない、という、彼女なりの誠実さなのかもしれない、と怜は思った。怜が、自分が下層階級であることを他人に告げたがると同じように……。

絵美は、そんな怜の共感を察したかのように、隣から座席の距離をつめて、怜に肩をつけてきた。そして、怜の右手首を取ると、その手のひらに、自分の左の手のひらを重ねてきた。

「ほら、私、身長割には、指が長めにできてるでしょう？」絵美が怜に訊いてきた。

怜はドキッとした。そして、ことの外ドキッとしたことに、自分

自身驚いた。

「でもやつぱり、男の方が、手は大きいよね……」絵美は、何も返答できない怜がつくった間を自分の言葉で埋めて、重ねた手を引っ込めた。

怜は、向かい側の依緒の方を一瞥した。無表情に怜を見つめるその目と一瞬視線が合ったが、依緒はサツと目をそらして、にこやかな顔をつくった。

「ホントだ、ホント、絵美ちゃんって指キレイだよー」そう言うのと、今度は隣の荘太の方を向いた。

「荘太君は？」依緒はまた、無口な荘太を促した。

「僕は……」荘太はつぶやいた。「ドラム以外、他のことは何もしてないし、できないから……」

それは、怜も同じ気持ちだった。怜もまた、あらゆることを犠牲にして音楽に打ち込んできた。荘太のその一言で、無口な彼との精神的な距離が縮まったように感じられた。

「多川さんはギターだってオレよりうまいんだよ」怜が言った。

「いや、そんなことないけど」鋼は謙遜した。「今まで音楽一筋つてわけでもなくて、サッカーとか写真とか、いろんなことにチャレンジしてきたけど、音楽が一番楽しかったから続いたのかな。もちろん、練習も十代の頃はハードにやったよ」

鋼は何かを思い出したのか、顔を少し曇らせた。

「でも、今の時代、演奏のうまさって、特に必要ないよ。だって最近のロックやポップスは、プレイのテクニクなんて誰も問題にしてないじゃないか。素晴らしい演奏と、ニセモノの演奏の違いを、評論家も見分けられないんだ。」

マスターフェイスにいた時は、ライブで『当てぶり』ばかりやらされた。アンプからは前もってレコーディングした音が出ていて、ステージにいるオレは弾いているフリ。今ではそれが、トッププロ

の世界では当たり前なんだ。それが、完成度の高いライブをやる最適な方法、ってことになってるんだよ」

それは、プロの間では、公然の秘密だった。

「このバンドでは、何でも遠慮なく弾きまくっていいんだよ」依緒は冗談ぽく言った。「でも、ミストーンは遠慮ぎみに弾いて下さいね」

（表面をきれいに取り繕うために、生演奏が否定されつつある世界。そして、生まれつきの才能ですら、お金で買うことができる時代。自分にとって、ライブで演奏する意味とは、何なんだろうか？）

（自分なりの誠実さを示す以外に、他に何ができるだろうか？）

怜はやがて、それを考えても無駄だと気づいた。

ライブの前夜、怜は興奮で眠れなかった。

当日、怜はややボーツとした頭で、阿佐ヶ谷のライブハウスに到着した。

その店は、広さはイエローアウルがよくプレイしていた新宿の店より一回り大きめだが、全員立ち見ではなくテーブル席中心のため、カウンター席を合わせても50人くらいのキャパだった。

三組のブッキングライブのトリだったが、他のバンド目当ての客が残ってくれていた他に、熱心なマスターフェイスのファンも、久しぶりに鋼のベースプレイを観られるということで大勢集まっていた、客席側の後方かなりの立ち見客がいた。

そして、ほんの数人ではあったが、イエローアウルのファンも、脱退後の怜のウワサを聞きつけて駆けつけていた。

二組のバンドの演奏が終わり、怜達のバンド、フロッグスの出番がやって来た。

ステージ中央に立った怜。

ボーカルバンドをしていた時には、サイドマン、という立ち位置にいた怜も今は、実質的にバンドの中心にいた。その緊張感、責任感、イエローアウルの時のその比ではなかった。

今まで自分がどれほど、津山という華のあるフロントマンに頼ってやってきたか、ということをし、怜はここでイヤというほど思い知らされた。

莊太の豪快なフィルインを合図に、一曲目がスタートした。

流麗なテーマのメロディを奏でる怜のギター、そして、それにぴたりとユニゾンする絵美のシンセリード。

鋼のベースと莊太のドラムは、メカニカルに、豊富な手数でリズムパターンを構築していた。

怜の即興パートが始まった。

愛用のファズが生み出す、空想上の動物の鳴き声のようなチョーキング、続いて畳み掛けるような速弾き。

熱く照りつけるステージのライト、イエローアウルでの最後の演奏以来の、久しぶりの感覚だった。早くも汗がにじみ始める。

その熱い皮膚感覚の向こう側にある、観客の温度。

それは、ことの外、冷ややかだった。

一曲終えた時点で、客の数は半減していたようだった。

確かに、フロッグスの音楽は、歌がないインストウルメンタルであり、パンキッシュなマスターフェイスとも、1960年代モッズ的なイエローアウルともまったく違った音楽性だった。

そして、2030年代の音楽シーンの流行からも、全くかけ離れ

たものだったのだ。

観客が期待していたものとは、かなりのズレがあったことは否めないだろう。

「どうもありがとう、僕らは今日が初ライブになる、フロッグスです。えー次の曲は……」

考えていたよりも短くMCを終えると、怜は曲を進めていった。そして、曲が終わるごとに、客が数人ずつ帰っていくのを見ながら、ライブは進行していった。演奏へのモチベーションを保つのに必死になりながら……。

最後の曲が終わった時には、ほとんど観客はいなくなっていた。終電が近いという時間でもなかった。多くは自発的に、この場を去ったのだろう。

怜のリーダーバンドの、初ライブが終了した。

楽屋に戻った四人は、静かだった。

荘太は汗びっしょりでソファーにどっと座り込み、ため息をついてふんぞり返った。

鋼は、丁寧にベースをクロスで磨き始めた。

絵美は、手早く帰り支度を始めていた。

そして怜は、パイプ椅子に腰掛けると、頭を抱えた。

「ごめん。マスターフェイスのファンの子達を裏切るようなことしちゃって……」

「何言ってるんだよ」鋼は、怜の肩をポンと叩いた。

そこへ、子どものような泣き声を上げながら、依緒が入ってきた。依緒の隣にはアイオンレコードの秋佳も来ていて、彼女の肩に手をおいてなだめていた。

「お疲れさん」秋佳は穏やかに笑った。

怜は、依緒の鳴咽に突き刺さるような罪悪感を感じていた。

「秋佳さん、それから……」怜は震えていた。「依緒……今日は本当に悪かった」

「それと、今までいろいろ助けてくれて、ありがとう。すごくいい経験ができたよ」

皆が怜の方に向き直った。

「やっぱり、このオレがバンドを引っ張っていくなんて、無理があったんだよ。オレにはそもそも、人を楽しませる力がないんだ……」

「違う……違うよ！」依緒は首を横に振り乱しながら、必死で涙声を発した。

「違うよ……私、こんなにすごい『イディアー』を感じたのは、初めてだよ……」

依緒は、くしゃくしゃな泣き顔の中にも、恍惚とした表情を見せていた。

「少し落ち着こう、依緒」彼女の横にいた秋佳が小声で言った。

「秋佳さんも聴いたでしょ？ 聴いたんでしょう？」依緒は秋佳に噛みつくように言った。

「音が、ひとつひとつの音が、光に包まれているようだった……」

秋佳は黙っていた。他の四人には、依緒に何があったのか、理解できるはずもなかった。

赤く腫らした眼で怜を見つめると、依緒は言い放った。

「怜クンには……」彼女の眼力は、怜を凍りつかせた。

「怜クンには何があっても絶対に、音楽を辞めさせないから！」

第7章

依緒が両親と顔を合わせるのは二ヶ月ぶり、弟の勇とは三ヶ月ぶりだった。

そして、家族四人での外食というのは、さらに久しぶりだった。ホテルの上層階のレストラン、窓際の席だった。2033年の東京の臨海夜景は、数十年前と比べると、さらに明るく壮麗であることは間違いなかった。

そのホテルのちょうど向かい側に、木乃内楽器本社の高い自社ビルがそびえ立っていた。テーブルを挟んで依緒の向かい側にいる、父、木乃内誠一の会社である。

「依緒は、仕事の方は順調なのか？」父が尋ねた。

「うん、まあ。いろいろ大変なこともあるけど」

父は、弟の勇には仕事のことは聞かなかった。勇は、誠一の会社である木乃内楽器で、鍵盤楽器のデモ演奏の仕事をして働いていたので、彼の仕事ぶりは誠一には日々わかつているのだ。

「秋佳さんに、ご迷惑かけてきやいいけど」母が心配した。

「最近、新しい仕事が始まって、わかんないことばかりだから、秋佳さんにはだいぶ助けられてる」

「ところで」依緒は思い出したように言った。「お父さんは秋佳さんと、昔から知り合いなんでしょう？　今までも聞いてはたけど、もつと詳しく知りたいな」

「いいけどな」父は一息ついた。「その話をすると、どうしても親父に対しての悪口が出てしまいそうだな」

「えー、悪口って何よ」依緒は口を尖らせた。「おじいちゃんのこと、嫌いだっただの？」

「いやいや、いい父親だったし、その職人気質は尊敬していた。ただ、木乃内楽器の経営については、いろいろなことがあってな」

「ふうん……」依緒はフォークを口に入れながら、気のない相づちを打った。

「依緒は小さい頃おじいちゃん子だったから、話しくいところもあつたんだ。でももう、お前も大人なんだし、いいだろう」

「おじいちゃんは、ヴァイオリンつくつてたんでしょ？ 私がい
た頃には、もうあまりやってなかったみたいけど」依緒は訊いた。
「依緒が生まれた頃には、会社の経営で手一杯だったはずだからな
お前のおじいちゃんは、ヴァイオリン職人としては確かな腕を持
つていたが、金勘定についてはまったくダメだった。経営面では、
当時部下だった秋佳さんから、かなり助けられていた。若い頃の父
さんも、秋佳さんから経営のイロハを学んだんだ。」

おじいちゃんは、自分が気に入ったお客さんには、採算を考えず
に値切りして楽器を売ってしまったたり、時には金のない若者にタダ
で楽器をあげてしまうことも度々あつた。それを気分屋のような感
じでやっていたから、秋佳さんも振り回されていたんじゃないかな」
「でもおじいちゃんは、たくさんの人から愛されていたと思う。い
ろんなミュージシャンがおじいちゃんを慕って遊びに来ていたよね。
私も小さい頃、その演奏を聴いてた記憶があるもん」依緒は祖父を
フォローしようとした。

「ただな、実はおじいちゃんは、外国の得体の知れない団体に加盟
していた。簡単に言くと、才能のある音楽家を、独特の方法で支援
するのが目的らしい。」

その独特の、というのが問題でな。奨学金制度のようなものじゃ
なく、やり方がいい加減だったようなんだ。

それで、その団体は確かつぶれてしまったようだが、その後もお
じいちゃんは自腹で相変わらず勝手な支援を続けた。一時はそれで、
木乃内楽器も傾きかけたくらいだったんだ」

「……」依緒は黙っていた。

「秋佳さんが中心になって、会社は立て直すことができたが、その

後、父さんにすべてを受け継ぎして、会社をやめてしまった。おじいちゃんのやり方に、さすがに嫌気がさしたんじゃないかな、わからないが」

「……それは、どうかな……？」依緒は口ごもった。

「海外から帰って来た秋佳さんに十数年ぶりに会って……父さんは実を言つと、不安だった。」

以前より老けた秋佳さんの表情が、死んだ親父と重なって見えたんだ。

楽器ではなく、レコード会社をやる、というのも意外だった。しかも、抱えてるアーティストは正直に言つて、お世辞にも売れそうではないじゃないか」

「お父さん！ 悪いわよ」母が制した。

「もちろん、秋佳さんのことは信用しているし、父さんにとっては恩人でもある。追々いつしよに仕事もしたいと、時々連絡もとっている。アイオンレコードのアーティストに、うちの楽器を使つてもらいたいからな。」

そして、お前が秋佳さんに賛同して、その仕事に着いているのもわかる。しかしな、父さんはちよつとイヤな予感もするんだ」

「お父さん、食事が進んでないわよ」母が、話に夢中の父に言った。父の前に出された二皿目の前菜が、ほぼ手つかずになっていた。

「第一さ」同じ皿をすでに平らげてしまった勇が、続けて話し始めた。「今の音楽シーンって、インディーズとか、マイナーレベルが入ってくる余地なんて、ほとんどないんだよ。音楽をリリースして儲けが出せるのは、五つくらいのメジャーなレコード会社とその関連会社だけだつて。」

ここだけの話、ポップスの人気は、そういうメジャーのお偉いさんたちに操作されてるんだ。みんな、つくられた人気なんだよ。

毎週のヒットチャートは、誰かを1位にしよう、誰かを2位にしようって、エライ人たちが決めていって、それをそのまま発表するのさ。

するとどうなると思う？ 現実の売れ行きも、次の週には、ほとんどその通りになっていくんだよ。

何でかって・・・何がいい音楽なのか、自分がどんな音楽が好きなのか、それを自分で決めることができる人が、どんどん少なくなってきたからだよ。

有名だから、評判がいいから、だから買うんだ。自分で決められないから、ヒットチャートに決めてもらってることさ。

そんな状況で、後から参入してきた会社に、勝ち目なんかないだろ？ いくら秋佳さんが優秀な経営者でもさ」

勇のここぞという時の話しの勢いは、さすがに母も抑えることができないでいた。

「あと、つい最近、面白いウワサを聞いたよ、エンペリアル社が、音源の中に洗脳情報を入れて・・・」

「勇、もうやめるんだ」耐えかねた父が鋭く言った。

「業界のタブーってものをわきまえなさい。それができてこそ大人だ。特にこういう、誰が話を聞いているかわからん場所ではな」

勇は口を引き締めるように閉じて、うなづいたが、またすぐ依緒の方を見て言った。

「まあ、オレも姉ちゃんや秋佳さんが、純粋に音楽が好きだっていうのはわかるよ。だから姉ちゃんのやることに、反対はしてない」

「もついい」依緒はあからさまにムツとしてみせた。「父さんも勇も、音楽を仕事にしてて、普段どれくらい、心から音楽に感動してるの？」

ふたりとも何も答えられなかった。

「私は毎日のように感動してるよ、強がりなんかじゃないし。後は、この気持ちるを他の人にも伝えていけばいいだけのことでしょう？」

私は必ずやってみせるから」

そう言うつと依緒はふくれながら、出されたばかりのアンコウのポツレを勢いよく食べ始めた。

「そうよ、依緒ならきつとできるわよ」母が言った。「お父さんも

勇も、みんな応援してるんだから」

「もちろんだ」父は依緒をなだめにかかった。「依緒がマネージャーをしてるバンド、何ていう名前だ？ 多川君はマスターフェイスの頃からうちのベースを愛用していると思うが、他の子達にも、良かったらエンドース契約を勧めておきなさい。木乃内の系列ブランドの楽器をタダであげられるから」

エンドース契約とは、楽器メーカーが製品の宣伝のために、有名アーティストに楽器を無償で提供する契約のことである。通常、フロッグスのような無名バンドには無縁のことだ。

「本当？ お父さん、ありがとう！」依緒は急に満面の笑みになった。

「親父はいつも姉ちゃんには甘いよな」今度は勇がふて腐れ始めた。

第8章

怜は渋谷のビルの高層階にある、アイオンレコード東京の事務所に初めて来ていた。

ライブ後、初めてのバンドミーティングのためだ。

そこここに西欧風の置物や花瓶が見られるのが印象的な意外は、普通の事務所と変わりはない。代表の秋山と数名のスタッフがいて、営業やスカウトで外を回っている人たちを合わせても全員で10名に満たないそう。

怜はまた、約束の時間より一時間ほど早く来ていた。代表の秋佳と話をするためだった。どうしても訊いておきたいことがあったからだ。

「依緒は、もう大丈夫なんですか？　ライブ以降、ここ数日は連絡とってないんですけど」

「ああ、もちろん、あの後すぐに落ち着いたよ。心配ない」

応接室のテーブルの向かい側に座っているのは、秋佳だった。

「あのコは、だいぶ気性が激しいところがあるのは気づいてました。でも、あの時はかなり変でした。バンドのメンバーも心配してましたよ」

怜は、その原因も知りたくて、話がしたかったのだった。

「僕は、何年もバンド活動してきて、それなりに音楽業界のことを人づてに話を聞いてきてます。だから……」

怜は言葉を選んだ。

「アイオンレコードが、他のレーベルとはかなり違う会社だな、っていうのは感じています。契約した時の状況がよくなかったのもあるけど、この会社のことについて、もっと詳しく教えていただけま

せんか？」

「そうだな、依緒が至らなくて、説明不足になっていたところもあると思うが」秋佳は詫びるように大きくうなづいた。「実は私も、迷いながらやっていたんだ。我々が抱えていることを、君にどこまで伝えるのが適切なのか」

「僕の頭で理解できるところまで、全部知りたいです。なぜ、こんなに平凡な僕が選ばれることになったのかも」

秋佳は首を横に振った。「我々の目からすると、君は決して凡庸ではない。我々には、音楽家の才能を見出すための方法があつて、それに基づいて言っているのだから、間違いはない。それは大昔から継承されてきている、独自の方法なのだ」

「・・・大昔って、アイオンレコードは新しい会社でしょう？」

「アイオンレコードは、ある団体の資本によって設立された。

驚かないでほしい、その団体とは、イディアー守護協会というもので、その起源は中世ヨーロッパとも、有史以前とも言われているのだ」

チュウセイ？ ユウシ？ 怜は混乱した。

「イディアー守護・・・それはどんな協会ですか？」

カルトか何かと関係あるかもしれない・・・と忠告してくれた、クラリネットの西沢の言葉が思い出された。

「その成り立ちについて話そう。ここからは、驚くな、と言っても無理だろう。」

イディアー守護協会は、中世ヨーロッパの吟遊詩人たちの旅を経済的・物質的に支援する、楽器職人ギルドや有志の大商人、貴族たちによってつくられたのだ」

吟遊詩人・・・リユートなどを弾き語りしながら、各地を放浪して回った音楽家たちのことか。いったい何百年前の話なんだろう？ 怜にはわからなかった。

秋佳は話を続けた。

「その団体はやがて、才能に恵まれながら不遇な生活を送る芸術家・

音楽家を助ける組織へと変貌していった。

それに伴って、彼らはより秘密裏に活動するようになっていった。協会員たちは、当時興隆した錬金術などの影響もあって、信じるようになっていったのだ。靈感を受けて作曲され、または演奏された音楽は、不可視の特別なエネルギーを放出し、人々に神からの至福をもたらすと。

太古の音楽には、そのような力が充分にあったのだ。人々を癒し、鼓舞し、全人的な進化へと導く、呪術的なパワーだ。中世の時代には、それがすでに失われつつあった。

中世社会の差別、偏見、間違った信仰心によって、音楽が秘める神性は、文化からないがしろにされていた。

だから、音楽を通じて、超自然的な力を再び取り戻そうとするその思想は、ある程度までは、的を得たものだったのだ」

怜は呆然として、言葉も出なかった。怜は、込み入った話になるだろうと覚悟を固めてこの事務所へやって来ていた。

しかし、秋佳が語るその壮大なストーリーは、怜の想像をはるかに超える、茫漠極まりないものだった。その話の真偽を疑うかどうか、といった次元の混乱ではなかった。

「もうすでに、私の話を受け止めきれなくなっているだろう？」秋佳は、怜の心情を察していた。

「それなら別の角度から話そう。学校の音楽の教科書に載っているような偉大な作曲家たち、その中には、生前は無名だったが死後に評価された者や、食うや食わずで生活していた頃があった者が、何人もいることを知っているか？」

「……い、いえ」

彼は、壁にかけられた、たくさんの作曲家の小さな肖像画の中から、ふたりの男を指で指し示した。

「幼くして『神童』と讃えられた、ウィーン古典派を代表する人物。後に『歌曲の王』として知られるようになる、ロマン主義の幕を

開けた人物。

彼らは作曲による収入を得られない不遇の時期に、友人たちから借金をしたり、無償でいろいろと奉仕させたりして生きていた、と伝えられている。五線譜を買うお金すら、自分で稼げなかった。

すでに意図的に、あらゆる記録からは抹消されているが、実は彼らは、イデИАー守護協会からの金銭や物資、そして精神的なケアや音楽上のアドバイスを受けていたのだ」

「・・・まさか」怜は、誰もが知っているその偉大な作曲家たちの逸話に驚愕した。

「ヨーロッパ音楽だけではない。時代を経て、アメリカ音楽の歴史の分岐点となるべき者たちも、我々協会の支援の対象となった。

例えば、悪魔に魂を売ってギター・テクニクを手にした、とウワサされた伝説のブルースマン。それから・・・

それまでヘタクソ、とさえ酷評されながらも、ある一ヶ月で突然啓示を受けたかのように神がかった演奏を始めた、モダンジャズのテナーサクソ奏者。

そして君も知っているだろう、60年代後半のたった3年ほどの活動で、後世に語り継がれる、あのロックギタープレイヤー。彼にも、ギターを売ってお金に換えることを考えるほどの、貧しい時代があったのだ」

「その協会が、彼にまで関わっていたなんて・・・」

「と、そう思うだろう？ 無理もない。

協会がお金を貸して支援したアーティストたちは、自分たちの私物を協会に渡すことで、義理を果たそうとする者たちが多かった。

この部屋には、彼らの、今となってはお金に換えられないほど貴重な品々がたくさん残されている。それが数ある証拠のひとつだ。もし興味があるなら後でじっくりと見て行くといい」

部屋の側面全体に置かれたガラス張りの大きなケースには、偉大な作曲家たちの遺品と思われるものが数多く展示されていた。

リユート、ギターなどの楽器類、いつの時代かもわからないほど

古い衣服、協会とやりとりしたたくさんの書簡など……いくつかのものには、サインもしてあった。二十世紀の欧米の著名アーティストの写真も、大量にあった。

「でも彼らは、誰でも知っている有名なミュージシャンだけど、協会のことは誰にも知られていないじゃないですか。いったい何のために、彼らを助けているんですか？」

ガラス棚から秋佳の方へ向き直って、怜が訊いた。

「協会は、発足当時の有志たちが寄付した資本を、安全な投資によって増やし、維持し続けている。協会の目的は、真に価値のある、普遍的な美を持つ音楽の保護、育成にある。ビジネスのためでも、名誉や権力の拡大のためでもない。

そして、彼らが不遇の時代を過ぎた時、世に出ぬまま消えて行く心配がなくなった時点で、協会も彼らの元を去る、それが原則なのだ。芸術家に他人が干渉しすぎないこと、それが、真に価値がある芸術を生み出す上で、欠かせないことだからだ」

その時、怜は息を荒げた。

「それなら、その『真に価値がある』と言える『価値』の基準は何なんですか？」

この世は結局、強い者が生き残るし、弱い者は消えていきます。そして、強いことが価値なのではないですか？ 僕はそう思ってた」怜は思い切って反論した。

秋佳も、怜の弁が立つところには、少し関心した様子だった。

「そうかそれなら、ここにいるアーティストたち……別の可能性を持った世界でなら、協会の介入なしでは、決して世に知られることはなかったはずの彼らは、結局いてもいなくても、どちらでもいい存在だったというのか、君は？」

怜は、その言葉でいっぺんに何も言えなくなった。

（それら偉大な作曲家がひとりでもいなかったら、彼らが後世に影響を与えることがなかったら、現代の音楽はまったく違ったものに

なっていたかもしれない。

まして、ここに肖像画のある、名立たる音楽家全員が存在しなかったとしたら・・・世界の音楽文化は、どこまで衰退してしまっていたかわからない・・・）

「ハッハッ、いや、それはいい質問なんだがな」秋佳が笑った。

怜は考えをまとめるのに必死だった。

「そういえばまだ、私と依緒の話をしてなかったな。君が訊きたかったのは、そっちの方だろう？」

「はい」怜はうなづいた。

「私と依緒は、イディアー守護協会の一員だ。私は、依緒の祖父に当たる、木乃内昌夫から協会員の資格を与えられた」

「依緒の、おじいちゃんから？」

「そうだ。彼は木乃内楽器の創業者、社長でもある。彼は自分の会社の楽器、特に自分の手でつくったヴァイオリンを、才能を見込んだ若者に、低額で提供していた。タダであげてしまうこともあった。

私は元々、木乃内楽器に勤めていた。そして、部下の中でただ一人、協会の秘密を社長から明かされた。

そして、音楽の意義、普遍性について学んだ。そして真に価値ある芸術を見定める方法を、時間をかけて受け継いだ。

いや、情けないことに、その時は、受け継いだと思い込んでいたんだ。

実際には、超自然的な価値を持つ音楽を見極める術は、二十世紀後半辺りから、一部の協会員の間で曲解が起こり、正しく継承されなくなっていたのだ。そして、世の中から後世に残る価値のある音楽自体が、急激に減少し続けてもいた。

そして、それが原因で協会員たちは、勝手な判断でアーティストたちを発掘することが多くなっていった。やがて、意見の食い違う者同士が協会の中で派閥を形成し、対立するようになった。

木乃内社長と私の、音楽家支援の活動もまた、独りよがりな偽善

になりがちだった、少なくとも私は、そう反省している。

協会が壊滅的な打撃を受けるのは、そんな中だった。間違った継承をしていた方の派閥が、協会の資金を勝手にリスクの高い投資に使ったために、ほぼ損失させてしまったのだ。協会は、存続すら危うい状況に追いつめられたのだ。

その後も、木乃内社長は自費で音楽家支援を行なったが、それは決して実りのあるものにはなかった。

その一方で、世界の音楽界は、急速にビッグビジネスへと成長を遂げ、金をどれだけ生み出せるかが、音楽の価値の唯一の尺度となっていた。

私は協会の幹部から、協会の再建のために、そして全会員に正しい継承が行われるように改善するために、ウィーンへ来て力を貸してほしい、と頼まれた。

私には木乃内楽器のことも大切だった。しかし、木乃内社長自身も協会再建を切望していた。そこで悩んだ末に木乃内楽器を退職して、協会で働くため、そして私自身の審美眼を改善するために、ウィーンへ渡った」

「それで、依緒はどうやって協会員に？」 怜は訊いた。

「幼い依緒のことは、私が木乃内楽器の社員だった頃からよく知っていた。依緒は、彼女から見て祖父に当たる木乃内社長が、とても好きだったようだ。社長が関わっていた音楽家たちの演奏を、子どもらしからぬ集中力で聴いている姿が印象に残っている。

社長は、依緒のことを、我々より音楽の神性を見抜く力を、生まれつき持っていそうだと度々言っていた。

私がウィーンから十何年ぶりに日本に帰って来てすぐ、依緒は私に会いに来た。彼女は当時、音楽大学の学生で、作曲を専攻していた。事情はよくはわからなかったが、日本の音楽界の状況に失望しているようだった。自分の作曲の才能にも、限界を感じていたらしい」

怜は、同じ大学にいた西沢の話を思い出した。「やっぱり依緒は作曲科に・・・学校で、あまりうまくいってなかったんですか？」
「詳しくはわからないが、その時期に、音楽に関連した不思議な体験をすることが多かったらしい。彼女は、あらゆるコンクールについて、それが始まる前から誰が入賞するのか、ほぼ間違いなく予見することができた。予見したことを、つい何回か親友たちに話してしまったところ、いろいろと怪しまれて関係がこじれてしまったことがあったようだ。すでにその頃から、協会員としての並外れた才能があったということなんだろう」

依緒が音楽について語るときに見せる絶対的な自信。その理由の一端を、怜は知った気がした。

「話を元に戻すが・・・私は、協会が再建され、新しい才能を発掘するためにレベルを立ち上げることを依緒に話した。表向きにレコード会社、というかたちをとって活動することは、協会の歴史の中ではもちろん、初めての試みだった。

彼女はそれに興味を示した。協会員の能力を獲得するためにウィーンへ行きたい、と言い出したのだ。

私は、大学を卒業することを前提に、進路について考え直しなさい、と忠告した。彼女の両親が猛反対することは、目に見えていたからだ。しかし、依緒は私のいうことを聞かなかった。協会のことは両親に内緒にしたまま、語学留学か何かの名目で、大学を中退してウィーン本部へ行ってしまったのだ」

「やっぱり、依緒って、そういうコなんだ」怜は乾いた笑い方をした。

「まあな。しかしすべては、彼女の音楽への純粋な愛から来るものなんだ。

木乃内社長が生前言っていた通り、彼女はウィーンの要請機関で、素晴らしい才能を発揮したようだった。そして、通常の十分の一以下の期間である、わずか半年あまりで協会員の資格を手にして、日本へ戻って来た。

そして、今に至っているのだ」

ひとしきり説明を終えた秋佳は、少し疲れたように大きく一息ついて、お茶を口に含んだ。

しかし、これだけ訊いてもまだ、怜の中には、しこりのように残る何かがあった。

「そもそも、世の中には、数えきれないほどたくさんのアーティストがいますよ。そんな中から秋佳さんたちは、どうやって後世に残る価値があるアーティストを発掘しているんですか？ この僕は、いったいどうして選ばれたんですか？」

秋佳は、少し間を置いた。

「……その答えは、依緒が先日、口にしていた『イディアー』にある」

秋佳は、言葉を選んでいうようだった。

「……『イディアー』については、秘術の内容に関わることで、今どこまで怜君に説明すべきかは、迷うところなんだ。それを知り過ぎてしまうことで、君の作曲に悪い影響を与えてしまう可能性が、ないとも言えないからだ」

「悪い影響って……？」怜にはわからなかった。

「つくり出す役割と、つくられたものを評価する役割は、別の人間がしなければいけない、ということだ。うーん、そんなことを言うても、余計混乱させてしまうな」

秋佳は身を乗り出した。

「とにかく、君にとって一番大事なことは、流行や他人の意見に捕われず、君の心の内側から湧き出てくるものをうまくつかまえて、音楽として表現することだ。それが、世の中にとってどんな価値を持つものであるのか、などと迷ってはいけない。

迷わないということは、とても難しい。我々は特にそれが難しい時代に生きているんだ」

「でも……」まだ釈然としない怜は、言葉を練っていた。

そこで秋佳は、さらに付け加えた。

「今まで協会が支援してきた偉大なアーティストは、自分自身の才能に対して、みな自覚的だった。彼らはどんな状況にあっても、自分たちの音楽の才能は、神から与えられたものだと思ひきつていた。君は自分を信じていない。だから君は、君を信じて手を差し伸べた私たちも信じられず、私たちは弁明すべきことが余計に増えていく。それが新たな問題を生み出しているのだ」

そのとき、部屋のドアが開いた。

現れたのは依緒だった。

「怜クン！ 早いね」依緒は少し驚いた表情を見せた。

「怜君は、私と話があつて早めに来ていたんだ」秋佳が言った。

「君たちはそろそろミーティングの時間だろう？ 私もこれから協会の定期会議があるので、もう行かねばならない」

秋佳は、応接室を出ると、奥の社長室らしき部屋へと入っていった。

第9章

ギター、ベース、ドラムが一体化した、シンプルで激しいロックのイントロが爆音で始まった。

ムービングスポットの光は幾筋も広いステージを駆け巡り、やがて中央に収束した。その光の中心に立っているのは、ボーカルの津山だった。

イエローアウルのデビューライブ、その会場は、ロックの殿堂とも言われる万人収容のホール。客席は満員だった。

津山の放つシャウトがガソリンとなって、観客は荒れ狂う火柱のような歓声を上げた。

ギターの吉沢とベースの水谷は、巨大なステージセットを歩きまわりながら、パワフルなプレイで津山を支えていた。

盛り上がる曲展開に合わせて、ステージ奥のスクリーンのVJの映像が目まぐるしく変わっていき、観る者を飽きさせなかった。すべての演出が超一級のエンターテインメントショーだった。

「デビューライブでこの規模はすごいね！カッコいい！」絵美はアイコンレコードのミーティングルームに置かれたテレビの画面に見入っていた。

部屋にはフロッグスのメンバーが勢揃いしていた。このメンバーと依緒を含めた5人全員が顔をそろえるのは、先月の初ライブ以来だった。

「これ、例の、怜が元々いたバンドなんだ」隣の鋼が言った。

「えっ？・・・ああ・・・」絵美は、褒め過ぎてしまったことにちよつと後悔した。怜がメンバーの裏切りを経験していたことは聞いていたのだ。

「チャンネル変えようか？」荘太がりモコンに手を伸ばした。彼がそつという気の利かせ方をすることは非常に珍しかった。

「いいんだ」怜が無表情に言った。「もうすぐ依緒の電話も終わるだろうし、ミーティングを始める時にヴォリウムだけ下げてください」

怜のお気に入りだった、例のバラードが始まった。そのイントロには、新加入のギターリストである吉沢なりの弾き方が加わっているものの、確実に怜のアレンジの個性とアイディアが残っていた。その幻想的な響きが、怜の胸に突き刺さった。

通常、アレンジには著作権は存在しない。怜が作曲のクレジットに名を連ねていない以上、もう彼とは何の関わりもないことなのだ。

（それにしても、つい数ヶ月前まで、立ち見で150人のキャパのライブハウスで演奏していたあいつらが、どうやってこの短期間で一万人のファンを集めることができたのか？）

怜にはまったくわからなかった。

怜の自宅にテレビはなかったので、イエローアウルがどれほど大々的にプロモーションを打っていたかは知らなかった。この時代も無料放送のチャンネルはあったが、それはあくまで中流以上のための情報源であり、下層階級の生活水準を考慮した内容の番組は、公営放送の中にすら皆無だったのだ。

今週の音楽情報番組はほとんど、イエローアウル的话题をトップに取り上げていた。その時の裏番組でも、彼らの衝撃的デビューを特集しているはずだった。

この時の怜は、メジャーレコードが人気を操作するしくみというもの、まだ理解していなかった。

「はい……はい……そうですね、……どうしてもダメなんです、わかりました」

依緒は通話を切ってから、力なくため息をついた。そして、テールブルについてフロッグスのメンバーたちの方を振り返った。

「最後の望みだったライブハウスも、ダメだって」依緒は、まいつ

た、というように首を振った。

フロッグスの次回以降のライブの予定を入れたいのだが、都内のあらゆるお店から断られているのだった。今後のライブ日程は、未だ白紙だった。

「もしかしたら」鋼が珍しく渋い顔をした。「オレが原因かもね」
「どうして？」依緒が訊いた。

「オレが所属していたエンペリアル社は、傘下にたくさんのライブハウスを経営してるし、それ以外の店も、たくさんのスカウトが新人発掘のために見て回ってる。スカウトがくる店は音楽ファンにも知られていて、それだけで店のステイタスなんだ。

いいアーティストを自分のところへキープしておくために、店にいくらか支払っているって話も聞いた。多くの店はエンペリアル社に義理があるし、そうでなくても嫌われるのはイヤなんじゃないかな」

「つまり？」怜はまだ意味がわからなかった。

「オレが加入したバンドは店で出演させないように、って支持している可能性は十分にある。オレはエンペリアル社と仲違いして飛び出してきた人間だからね。あいつらは、一回自分たちのところを抜けていった奴に対して、まったく容赦がない。びつくりするくらいになわばり意識が強い会社なんだ」

怜は、音楽業界のトップの厳しさを淡々と話す鋼を、感心して見ていた。

鋼は怜に言った。

「でもそういう怖さは、怜がイエローアウルにいたときに声をかけてきた、ウルテームレコードも負けてない、と思うよ。

元イエローアウルのメンバーって触込みで、バンドを売名で売り出すことは絶対に許さないはずだよ、オレらの方にそのつもりがなくてもね」

怜は、原因の一端が自分にもあるかもしれないことに気づいて、うなだれた。

「後は、ストリートでできるところがないか、調べてみるよ。とにかく今はどんな環境でも経験を積まないだね」依緒が言った。

「それから、レコーディングの準備も始めてしまおう」

怜はリーダーらしく意見を言わなければいけない、と思った。

「ぜひ、他のメンバーにも曲を書いてもらって、アルバムに収録したいんだ。お願いできるかな？」

鋼と絵美はうなづいた。

「莊太にも、リズム的なアイディアを出してほしい、まず一曲共作しよう」

莊太も自信なさげに首を縦に振った。

「私たちも、イエローアウルに負けないように、がんばりましょー！」

そういう絵美の言葉は、どうしても怜には意地悪な冗談に聞こえてしまった。自分のバンドは、とてもこんな人気グループと張り合えるような状況ではない、そう思わずにはいらなかったのだ。でも、絵美が何を言っても、怜には憎めなかった。

「そうね。絶対負けないよ！」依緒は調子外れなくらい真剣な顔で受け答えた。

「絶対、負けてないよ。だって……」

テレビには、ちょうど一曲を演奏し終えたイエローアウルの姿があった。

「だって……このバンドはもう……」依緒はそこで言葉を飲み込んだ。

（もう、イエローアウルからは、以前ほどには『イディアー』が伝わってこない）

秋佳は、アイオンレコード東京事務所の奥の間にいた。中世期ヨーロッパに確立された植物的な装飾が、床から壁、天井に至るまで

全体に施されたその部屋の中央に、遠距離会議用の巨大なディスプレイが置かれていた。

ディスプレイの向こう側には、イディアー保護協会のウィーン本部、メンフィス支部の幹部の面々が、奥行きのある立体映像で移されている。

秋佳はそのモニターと向かい合い、すでに始まっている活動報告に耳を傾けていた。

イディアー保護協会の公用語は、ラテン語、ギリシャ語、ゲール語などのヨーロッパ言語を元にした、独自の言葉が使用されていた。協会は、危機的状況から立ち直ってまもなく、伝統を正しく継承すること、同時に過去の過ちを修正し、時代に合った支援体制を確立することを、幹部たちは会議の中で模索していた。

「ボクシンの三人は、目下アフリカ北部をツアー中。平均客数は800で客足も好調、予想以上の反響を得ています。

彼らがツアーをした地域では、2、3日治安が良好になってきていることが、派遣隊の独自調査から明らかになってきました。これがその相関図です」

チュニジアに滞在中の、ボクシンのチーフマネージャーが説明していた。

「ついにあの三人から、音楽を直接耳にしていない人間にも影響を与えるレベルのイディアーが出始めた、ということになりますか」
メンフィス支部長は感心した様子だった。ボクシンのマネージャーは大きくうなづきながら、続けて言った。

「ただし、フリーコンサートも数多く実施しており、当初から採算見込みの薄い計画のため、経済面では引き続き協会からの支援の継続は必要です」

「それは致し方あるまいな。支給額については後に詰めよう。彼らの無事と音楽的成長を祈っているぞ」協会長が言った。

「それでは次に、ジェフ・ラビンとルディの状況は？」ウィーン本

部長が進行した。

「海外でのすべてのコンサート日程を終了しまして、ジェフは今後一年をルディのヴァージョン・アップのための研究に費やしたい、と申しています。さらなる芸術性をルディに教え込ませたい、このことです。」

ただ、彼は来年度から、その能力を認められ、人工知能研究所の中核にある人工言語野のグループに加えられる予定です。そして孤軍奮闘してきた彼の即興演奏のプロジェクトは、予算を打ち切られる可能性もあるそうです。彼は平行してふたつの研究を継続させるため、密かにスポンサー集めも始めていますが・・・」

メンフィス支部長が説明した。

「協会からも研究費用はでき得る限り支援しよう。ルディは機械故に、人間と同様のレベルのイデИАーを発生できるわけではない。しかし、その存在が、今後も芸術・科学の両面で後世に大きな影響を与えるものであることは間違いがない。引き続き、開発費などの経済的援助は必要だろう」協会長が言った。

「では、まだ活動を始めたばかりの、フロッグスについては？」

秋佳の説明し始めた。

「彼らは今後、ファーストアルバムのレコーディングに入る予定です。スタジオ代、エンジニア等の人権費など、レコーディング費用の支出はあります。それと最近になって、ライブ活動に支障をきたす存在が・・・」

「『抑圧者』か・・・やっかいだな」メンフィス支部長が渋い顔をした。

「私たちの予想以上に早く現れてきました。やはり日本は抑圧者の力が、特に強い国かと思います」

「フロッグスのメンバーには、日本のいわゆる下層階級者がひとりふたりいるだろう？ その点についてはどうだ？」協会長が訊いた。

「長時間のアルバイトでどうにか生活を支えている者もあります。ライブによる報酬が見込めない現状、彼らが音楽に専念できるように、生活費の支給も検討していただければ、と存じます」それは兼ねてからの秋佳の希望だった。

「そうだな・・・それは懸案だったのだが・・・フロックスは、一種のハングリーアートの性質を有している。故に、単に金銭を支給することが、彼らの芸術への支援になるかどうかは、東京という都市の文化性も踏まえつつ、慎重に考えなければならない。

過去に、協会が経済支援を過剰にやってしまったために、墮落してしまったアーティストは数多くいたのだ」協会長が答えた。

「生かさず殺さず、と言っているように聞こえるかもしれないが、悪く思わんでくれ。自分たちが抱えているアーティストに楽をさせてやりたい気持ちはわかる。しかしな、例えば、秘境の先住民に、善かれと思つて家電製品を与えてしまったら、その民の文化が壊れてしまふのに似ている。

下層階級は、貧しいことそのものよりも、自分の人生において適切な金の使い方を学んでいない、ということが問題なのだ」ウィーン本部長が、意見を述べた。

「もちろんです、ただ、アーティストの金銭管理はマネージャーも関与しますから・・・」秋佳が食い下がった。

「そうだな、これも引き続き検討しよう。いずれにしても、彼らが楽器を取り上げられるようなことにはならないよう、引き続き注意してくれたまえ」協会長が指示した。

「はい」秋佳は多少のわだかまりを残しながらも、了解した。

ミーティングから約一ヶ月後、鋼が作曲した2曲、絵美の1曲、そして荘太と怜が共作した1曲が、怜のオリジナル5曲に加わり、フロックスの最初のアルバムの収録楽曲がそろった。

その後、レコーディングのリハーサルを兼ねたストリートでのラ

イブが、駅周辺や大きな公園で何度か行われた。

観客からお金を取っているライブハウスでのライブのようなプレッシャーがない分、彼らは積極的に、いろいろな音楽的実験を重ねることができた。

はじめは、その独りよがりになりがちな演奏のためか、通りすがりの人々が足を止めることは稀だった。その代わりに、街路樹の木々に大量の野鳥がにわかに集まり始めた。四人のメンバーは一様に驚いたが、依緒だけは笑っていた。

やがて、バンドの連帯が高まるにつれ、人だかりができることも多くなっていた。

その中のごく少数の人たちが、彼らの流行にまったく追従しない、創造性にあふれたサウンドに驚嘆し、依緒が配るチラシに見入っていた。

天井のない場所に響き渡るギターの爆音に、怜は酔いしれた。そして、ひとつの有機体のように連動する四人のサウンドに、限らない期待を抱いた。

（これが、オレの求めていた、この四人にしかできない音楽なんだ。これをそのままレコーディングしたら、本当に大変なアルバムができあがる……）

曲想がバンドの中で固まってくると、フロックスは都内のスタジオでレコーディングに入っていた。

アイオンレコードでは、アーティストの経験の程度に関わらず、セルフプロデュースが原則、という方針があるようだった。そのため、アルバム制作のプロデュースとディレクションは、バンドリーダーである怜にゆだねられ、外部スタッフはエンジニアとそのアシスタントのみだった。

当初、怜はその状況に強い不安を覚えたが、マスターフェイスで

プロデューズの経験がある鋼が、彼の強力な支えとなった。またスタジオミュージシャンとしてレコーディング経験が最も豊富な絵美も、知識を与え、怜の意思決定をサポートした。

また怜は、新しいギターを手に入れていた。

鋼のベースと同じ木乃内楽器のオーダーメイド・ブランド『ドラゴンズロアー』とエンドース契約をしたのだった。

まだ活動を始めただけで、宣伝力のないバンドが楽器のエンドース契約をすることなど、前例はなかった。これは完全に依緒のコネのおかげという他なかった。

クラフトマンは怜の希望通り、弾きやすさ、機能性を重視した、手の負担が少ないモデルをつくりあげた。それは、ストラトをひと回り小さくしたようなオリジナルモデルだった。

怜は、初めて弾いた瞬間から手になじんできたこのギターに、とても満足していた。そして、弦の鳴りをクリアに引き出すその音が、愛用している手作りのファズの混沌としたサウンドと、とても相性が良かった。

外見的には、カエルにちなんだ黄緑色の塗装が印象的だった。

即興パートの多い楽曲、ライブ感を重視した演奏というテーマもあって、録音は一気に進められた。

初リハーサル時点で最高のプレイをしていたメンバーたちは、リーダーの怜も依緒も、終始文句のつけようがない奇跡的な演奏を当然のように見せてくれた。

そして、メンバー全員が納得のいく、わずか七日間のレコーディングが終了した。

録音をした音を調整・混合する、ミキシング作業の初日。エンジニアは、バスドラムの調整からスタートさせ、ズンズンという重低

音をコンソールルームに響かせた。室内後部のソファーには、怜と莊太が座ってその音に耳を傾けていた。

二人には、サウンドについてエンジニアに希望を伝える以外には、特にやるべきことはない状況だった。

依緒は室内に入ってきて、外に長く音が漏れないように、重いドアを急いで閉めた。

「今日は、絵美ちゃんと鋼くんは、用事があって来られないって」
依緒が、怜の耳元で言った。

「絵美ちゃんとは他の仕事があるって聞いてたけど、鋼も？」怜が聞き返した。

「鋼くんは急用みたい」

「そうなんだ」

怜は常々、有能なミュージシャンである鋼が、一歩引いた立ち位置から、リーダーである自分を助ける立場で、誠実に休みなくバンドに関わってくれていることを申し訳なく思っていた。

だから、彼にその時珍しく用事ができたということについて、特別、気にすることはなかったのだ。

第10章

鋼は、食パンとコーヒーとサブリで朝食をすませると、時計を見た。8時前だった。

彼は、都内の2DKの立派なマンションに、三つ離れた妹の麻矢と二人暮らしだった。

麻矢は、芸能事務所に所属するモデル兼歌手だった。来年にはポータルグループの一員として、メジャーデビューするという話が決まりつつあった。鋼が元所属していたバンド、マスターフェイスと同じ、業界最大手のエンペリアルレコードからである。

麻矢はモデル業のかたわら、ボイストレーニングに通い、鋼以上に忙しい生活を送っていた。

「おい、麻矢。今日は事務所行かなくてもいいのか？」

鋼は妹の部屋のドアに声をかけた。しかし、まったく返事はなかった。

互いの忙しさのせいで、妹との会話が少なくなってきたのを、鋼は気にかけて始めていた。

「おい、開けるぞ」

そついうと鋼は、ゆっくりとドアを開けた。室内は真つ暗だった。妹の麻矢は、ベッドの上の布団に、頭から包まって寝ていた。

「お前、昨日の夜帰ってきてから寝たきりで、何も食べてないんじゃないの？」

「……………うん」麻矢が返事をした。目は覚めているようだった。

「今日は事務所に行かなくてもいいのか？」鋼は再び聞いた。

「……………」麻弥は答えなかった。

「何かあったのか？」

「・・・事務所、昨日でクビになったの」

「どうして？」

「・・・わからない」

「だって、エンペリアル社からデビューの話が決まりそうなんだろう？」

「もうないの」

「どうして？」

「デビューの話が・・・なくなったの、おととい。それで、昨日は事務所からも、辞めてもらうって。理由はよくわからないの、どっちも」

おとといから、鋼のレコーディングが大詰めで、麻矢と顔を合わせる時間がとれなかったのだ。

「わからないって、お前・・・」

（オレがエンペリアルとケンカして辞めたことと、何か関係がありそうな原因なのか？）

鋼は、それを妹に訊こうとして、すぐ呑み込んだ。

「エンペリアルには、まだ話せるオレの知り合いもいるんだ。ちょっと事情を聞いてくる」その代わりにそう言った。

「やめて！ もういいの！」妹は布団を慌てて剥ぐと、鋼に険しい顔を見せた。

「だって、お兄ちゃんは今日だってバンドの用事があるんでしょ？」

「そっちは大丈夫だ。レコーディングは終わっているから、今日急に休んでもそれほど迷惑はかからないはずだ」

そういうと、鋼は手に持っていたジャケットに袖を通して、部屋を出て行った。

「だから、もういいんだって・・・！」

麻矢には、それを追いかけて静止する気力はなかった。

エンペリアル本社ビルの玄関ホール前で、鋼はスーツ姿の若い男

と向かい合っていた。

「本当に10分しか時間が取れないからな、手短に頼む」

エンペリアル社の制作本部一課の課長、堀上が言った。彼は、元々新人だったマスターフェイスの担当であり、特に鋼とは友人としても親しい仲だったが、最近、現在の役職に若くして出世したのだった。

「突然ですまない」鋼が、気心知れていた友人に、深々と頭を下げた。

「麻矢が、突然理由もわからずにデビューの予定を取り消されて、所属事務所もクビになったんだ。何かそのことで知っているか？」

「ああ、妹さんね」堀上が何かを思い出すように、わざとらしく上を向いた。「オレの担当じゃないんだけど、何か問題はあったようだな」

「思い当たることはないか？」

「どうだろうねー」

「オレがエンペリアルと揉めて辞めたことと、何か関係があるのか？」

「んーどうだろうねー、うちみたいな会社の場合は、ないとは言いきれないだろうね、正直。お前を売り出すのにかなりのお金をかけた側からしたら、心情的にも決してスッキリしてないだろうからな」

「でも、オレと麻矢は、音楽のことでは関係ないだろう！」

「いやいや、オレが決めたことじゃないから、言われても困るってそれに、彼女自身にも、いろいろ原因はあったんだと思うよ。だってうちのレコード契約だけじゃなくて、事務所の方もクビになったわけだろう？」

「・・・・・・・・」

「そう言えば、ちょっとしたウワサも聞いてたけどな・・・・」

「何だ？」

「何だっけ、名前忘れたけど、あそこの芸能事務所の所属の娘達の何人かが、最近仕事に身が入ってないって、あちこちで話を聞いて

たし。確か麻矢ちゃんが所属してたところだったと思うよ」

「デビュー前の新人が、そんなにあちこちでウワサになるのか？
身が入ってないって、ボイスレススのことか？」

「何言ってるんだよ、接待に決まってるだろ」堀上の顔が一瞬にやけた。

鋼は固まったまま、何も言えなかった。

「みんなやってて、お前の妹だけやってないなんてあり得ないんだからさ」

鋼は目の前の元親友を殴り倒したかったが、彼だけが悪いわけではないということもわかっていた。そのデリカシーのなさに対しては許し難いものがあつたが、それだけでは、この公衆の面前で拳を振り上げる理由としては不十分だった。

鋼はこみ上げる怒りを必死に抑えていた。

「じゃあ、オレそろそろ時間だから」堀上が席を立ち上がった。

「・・・心情的に」鋼が言った。「心情的にスッキリしてないのは、オレも同じだよ。オレは、お前が思っている以上に、エンペリアルのことを知っている」

「おいおい、まったくお前らしくないな。あの時の、いつもクールなお前はどこへ行った。本当にバカなことは考えない方がいいぞ。妹さんを大事にな」

そついうと、堀上は携帯をいじりながら足早に去っていった。

「お前こそ、だいぶ変わったな」

鋼の最後の声は、堀上には届かなかった。

「はい、トラッドロックマガジン編集部です」

「多川と申しますが、編集部の岸さんをお願いします」

「はい、わたくしですが・・・あれ、マスターフェイスの多川君？」

「あ・・・はい、元、ですけどね」

「久しぶりだねー！ 今どうしてるの？ 音楽は続けてるんでしょ？」彼はフロッグスの存在すら知らないようだった。トラッドロックマガジンが対象にしているアーティストの知名度を考えれば、知らなくて当然だった。

「はい、今は別のバンドを始めています。でも、今日お電話したのはそのことじゃなくて」

「何、どうしたの？」

「そちらの会社で、政治や芸能の裏情報を取り上げる有料サイトがありますよね」

「ああ、あるよ、スコープでしょ？」

「そちらに提供したい情報があるんです。話を通してもらえないですか？」

「えーっ、そんな話かい？ 何だか意外だな。多川君って言ったら、熱心にベースを弾き続けてる姿しか思い浮かばないから、芸能情報とか気にしてるなんてびっくりだよ」

岸は、マスターフェイスのインタビュー記事を手がけていて、メンバー全員のことをよく知っていた。

「で、どんな情報なの？」

「ここでは言いにくいことです」鋼は声を落とした。

「ほー、そんなにヤバい話なの？ それより、そんな話して大丈夫なの？」

「覚悟はしてます」

「僕も紹介する立場から責任もあるんで、どんな内容か教えてよ」

鋼はちよつと間をおいてから、一気に話し始めた。

「はつきり言いますけど、エンペリアル社の音楽に含まれている洗脳情報のことです。」

音楽自体の内容とは無関係に、音の中に、耳に聞こえないけど、人の精神をコントロールする情報が入っているって話です。

自社の音楽に、強制的に好意を持つ暗示をかけられるだけでなく、食品のタイアップ曲には食欲を増進させる効果があるとか、い

ろいろな目的で使われ始めています。

エンペリアルは去年から始めていますが、ウルテーマ社もそれをイエローアウルのシングル曲で試験的に使い始めて、予想以上の効果を上げているって聞いてます。

後々、その効果を政治利用する予定も……」

熱くなって、ややしゃべり過ぎたことを後悔した鋼は、岸から反応がないのに気づいた。

「もしもし？」

「……ああ、聞いている。多川君、その話、どこから聞いたの？ そんな話はネットと隅々まで見ても、ガセでも載っていないようなトンデモ情報だよ。根拠はあるの？ 証拠になる写真とか」

「……特にありません。ただ、僕がいたときのマスターフェイスの曲では、すでに使われています。マスターリングの段階で混入されるんですが、僕はそこに立ち会っていますから」

鋼は、マスターフェイスの楽曲の売り上げを少しでもあげるために、その場に流されてしまっていた当時の自分を恥じていた。

「スコープは業界でも信憑性が高いっていうのが売りだから、話だけっていうのは難しいと思うんだよね……ここから出た情報は、影響がすごく大きいし」

「……だからお願いしてるんです。こちらも知っていることはまだありますから」

「第一、そんなことをリークするって、多川君らしくないよね、どうしたの？」

それを言われるのは二度目だった。

「……いや……すいません」鋼は訳もなく謝った。

「まあ、スコープの人には相談しておく。あまり期待しないで待って。もし行けそうだったら、また詳しく話を聞くから」

「はい、よろしく願います」鋼は電話ながら、頭を下げた。

「今日も鋼クン、来ないね」

ミキシング二日目の朝、依緒は首をひねりながら言った。

「オレのところにも、連絡はこなかったな」 怜も不安な顔をした。

「こっちから、いくらかけてもつながらないし」

「鋼にもミックスした曲のサウンドを聴いてもらわないと。自宅にできあがった音のデータは送っているんだけどね」

とその時、依緒の携帯が着信した。アイオンレコードの秋佳からだった。

「そっちに鋼クンは来ているか？」 秋佳が尋ねた。

「いえ、昨日から来てないんですよ」

「今、妹さんから電話があつてな。昨日の夜から家に帰ってないぞうだ」

「えっ！」

「妹さんは、鋼クンがレコーディング中なのは知っていたから、スタジオで寝泊まりしたのかと思ったらしいが、心配になってかけてきたようだ」

「どうしたの？」 怜は、通話したままこわばった表情の依緒を見つめた。

依緒の携帯に、鋼の遺体が発見されたと警察から連絡が入ったのは、その直後だった。

湾岸沿いの倉庫わきで、倒れていたという。死因は不明だったが、薬物の過剰摂取ということらしかった。

依緒、怜と荘太は、その場所へ駆けつけた。

ショックのあまり、怜の記憶には、その後しばらくの出来事が明確には残されていなかった。その日のうちには事実を受け入れられず、錯乱しそうになるのを必死で耐える以外になかったことは憶えていた。

莊太はすぐに、狂ったように号泣した。二年前に両親を亡くしたばかりで、そのときのトラウマもいっぺんに襲ってきたようだった。「きつと僕に、死神か何かいるから……」莊太は泣き疲れた頃につぶやいた。根拠のない妄想に取りつかれているようだった。「いや、それはない。莊太はまったく悪くない」怜は、莊太の肩にしばらく手を乗せていた。

絵美もその横で、泣きじゃくり、目を腫らして言った。

「鋼くんは、クスリなんてやってないはずだよ、全然そんな感じじゃなかった……タバコも吸わないし、ストリートライブの後、みんなで飲みに行ったときも、お酒の飲み方がわかってる人だった。それなのに……何かおかしいよ……」

依緒は無表情だった。警察からの事情聴取に自ら進んで、冷静に受け答えした。しかし、顔は人形か何かのように生気がなかった。

鋼の妹の麻矢は、安定剤を飲んで熟睡しているということだった。眠るまでは、尋常ではない取り乱し方だったようだった。

スタジオではいつさいの作業が中止となり、怜はその日、夜遅くに自宅アパートに一人で帰った。

（もうバンド活動どころじゃない）

部屋に着くなり、怜は床に倒れ込み、そのまま朝方まであれこれと思い巡らし、明るくなる頃に眠った。

音楽の価値が、一気に最低にまでおとしめられる一日だった。

第11章

鋼の死は、薬物の過剰摂取によるものと断定され、殺人の疑いはない、ということになった。

家宅捜索が行われ、妹の麻矢の部屋までもが入念に調べられたが、薬物はどこからも発見されなかった。

人気バンド・マスターフェイスの元ベークシストの死亡事件は、マスコミでも大きく報道されることになった。

マスターフェイスは、鋼への美しい追悼文を発表、ついで彼をテーマにした美しいバラード「ステイルハーツ」を緊急リリースした。

バラードは異例の大ヒットを記録、マスターフェイスはそれを機に、日本を代表するバンドのひとつとしての地位を確立しつつあった。

フロッグスの奇跡的なレコーディングの音源は、外注のエンジニアやジャケット・デザイナーの尽力でアルバムとして完成し、秋佳と依緒によってリリースのための手続きが進められた。

ライブハウスからの締め出しと同様に、アルバムの流通についても原因不明の障害があったが、ネット配信、公式サイトでの受注販売、一部の小売店舗からの販売には、なんとかこぎ着けることができた。

だが、鋼の死とそれによるメンバーの精神的ダメージによって、あらゆるプロモーション活動の機会は断たれた。定期的なミーティングすらなくなり、フロッグスは空中分解寸前だった。

しかし、鋼にとつての遺作となったこのアルバムは、皮肉にも、彼の謎の死という話題性によって、高い注目を浴びることになって

いった。

鋼の死から三ヶ月後。各々が少しずつ、悲痛を心中に受け入れ始めてきた頃。

依緒は、久しぶりに触れるグランドピアノで、リストの『愛の夢』を弾いていた。

あまりに久々なので、運指が粗く、ミストーンを所々出した。

「お茶入れてきたから」

絵美がトレイを持って部屋に入ってきた。

ここは絵美の自宅、2LDKの防音の高級マンションだった。

「はい、いただきます」

依緒はあわてて演奏を止めて、絵美に向き直った。

「あれ、途中でやめないで弾いてよ、って私が声かけちゃったからだよね」

「じゃなくて、絵美ちゃんの前でこんな下手なピアノ、恥ずかしいよ」

それでも、目の前にあれば弾かずにはいられないほど、依緒はピアノを愛していた。

「これはすごくいいピアノだね」依緒は鍵盤のフタを降ろした。

「だってキノウチのピアノだもんねー」絵美は冗談ぽく言った。

二人は笑った。

「どうしても、続けるのは無理？」

もう、依緒の顔は真剣な表情に変わっていた。

「うん、ごめんね」絵美はこくりとうなづいた。

「あるアーティストのバックバンドの仕事が入ってきたの。レコーディングとライブツアーとね。引き受けると、たぶん向こう一年は

スケジュールが埋まっちゃうかもしれない」

「そう」依緒は、がっかりした顔をみせて絵美を困らせたくはなかったが、難しかった。

「そのアーティストは以前からずっと尊敬し合ってきた仲だから、今回も断わりたくないの、どうしても」絵美が言った。

「わかった・・・それならしかたないよね」依緒は強くうなづいた。「怜クンたちや、秋佳さんには先にうまく言っておく」

「ごめんね」絵美はもう一度謝った。

「いいの。うちは至らないところも多いし、決して条件のいいお仕事じゃなかったと思うけど、本当に今までよくしてくれたと思うもん。ありがとうね」

絵美は、現状の実力と人脈で充分に、音楽業界のトップでやっていくことができたのだ。

「少ない人数の社員だけで、レコーディングに関わってマネージメントもやって、すごくよくやってるって思うよ、アイオンって。依緒ちゃんがそれだけ優秀なんだよ」

「やだー誉めても何も出ないけどね・・・そうだ、絵美ちゃん、今日は珍しく時間あるんでしょ？」

「うん」

「じゃあ、これから買い物とか行かない？」

「楽しかったねー結局、誘われた私の方が、いろいろつき合わせちゃったよねー」絵美は、依緒の車の助手席でショッピングの大きな袋を抱えていた。

「ううん、私もたくさん買ったもん」依緒は、左ハンドルを握り、前を向いたまま答えた。

ラジオから、マスターフェイスのバラード「ステイールハーツ」が流れ始めた。

「これ、きれいな曲だね・・・演奏はともかく、楽曲に珍しいイ

「デИАーを感じる」依緒が言った。

「イデИАー？」絵美が眉にしわを寄せた。

「あ、いや、何でもないの」

「こんな売名ソング、誉めるのおかしいよ」絵美がラジオを別の局に変えた。

「あ、まさか、さっきのが？」依緒はマスターフェイスを聴いたことすらなかったのだ。

「でもあの曲、鋼クンがフロッグスに書いてくれた曲と、コード進行がよく似てるんだよね。もしかしたら、鋼クンが書いたお蔵入りの曲を、どこかから掘り出してきて使ってるのかも」

依緒は、しばらくできた沈黙を埋めるために、話題を選び出した。

「絵美ちゃんってさ、ずっとつき合ってる彼氏がいるんだよね？」

「うん、お互い忙しいから、最近なかなか会うヒマないけどね」

絵美はにやけた。「依緒ちゃんはいの？ あんまりそういう話してなかったよね、依緒ちゃん。口を開けばみんなの心配ばかりで、自分の話をしないから、謎だらけだよ、未だに」

「そうかな、私はいないよ、彼氏」

「仕事が恋人とか言わないでね」

「音楽が恋人、かな」

「あれ、怜クンの音楽が、じゃなくて？」

依緒は黙り込んだ。

「好きな人はいないの？」

「ん、えっ、ええっ？」依緒は動揺を隠せなかった。

「底抜けにピュアだな」依緒ちゃんは。ほら、ちゃんと落ち着いて運転してね」

絵美は、ちょうど右折する依緒をハラハラしながら見ていた。

「うん、まあ、いるには、いるけどね・・・」

「まさか、秋佳さん？」絵美の目が皿のようになった。

「イイイッ！」依緒は意味不明なうなり声を上げた。

「秋佳さん、うちのパパと同じくらいの歳だと思うけど、カッコいいよね〜若々しいし」

「確かに……尊敬……してますよ」依緒は低い声で言った。
「秋佳さん……ステキな……人だと思います」

「ふうん、やっぱり、そうだったのか……」

「……って、そんな言葉にごまかされるかぁ〜！」

絵美は、依緒が運転中でなければ、身体ごと飛びかかりそうな勢いだっただけだ。

「ギター弾いている時の怜クンを見つめる依緒ちゃんのうつとりした眼、眼、眼！キラッキラしたピンクのお花畑にでもいるのかってくらい、いつもすごかったよぉ〜。最初見つけた時は、いっしょに弾いてるこっちの演奏がメチャクチャになりそうほど、吹いてしまいましたっ！今だから言えるけどね！」絵美はフォルテのスタッカートで畳み掛けた。

依緒はしばらく何とも言えない表情で言葉を選んでいたが、やがて真剣な顔で言った。

「……音楽を好きになると、それを生み出す人を好きになるのは、別でしょう？でもね、もう私にも……よくわかんないの。どう思う？」

「ふうん……」絵美も急激に静かになった。「そうだね〜いっそのこと、その質問をご当人に投げかけてみちゃったら？」

「ええっ、それは困らせちゃうよ……」依緒の顔が一瞬にやけたように見えた。

「もういいじゃない、いくらでも困らせちゃえば。言わないまま終わるよりはいいよ」

絵美は穏やかな顔になっていた。

「だって、人間なんて、いつ死んじゃうか、わからないんだもん……」

その翌日。

「怜クン、今大丈夫？ 何してる？」

依緒が怜に電話するのは一週間ぶりだった。

「バイトが終わって、ギター練習してるよ」怜は相変わらずの返事をした。

「大事なことがあって、話したいの」

「うん、何？」

「これから会いに行ってもいい？」

「うん、前に三野さんといった団地の中の小さい公園にいる。今はひとりだけだね」

怜は、他に誰もいない夕方の児童遊園で、依緒から、絵美の脱退を報告した。

それを聞く彼は努めて冷静だったが、やがてひとりになって考えた時に、深い悲しみがわき上がってくることは覚悟していた。

これで、現状フロッグスのメンバーは、怜と荘太のふたりになったわけだ。

「最近はよくここで弾いてるの？」

「うん、アパートの新しい隣の入居者がね、生ギターの音量でも漏れてくるのをすごく嫌がって、時々苦情を言いにくるようになったから。練習する時はほとんど外だね」

「そうなんだ」

「荘太も連れてきて、いっしょにやることもある。ここでも近所迷惑にならない程度にね」

依緒は、ブランコへ歩いていった。

「そう言えば、だいぶ前のことだけど・・・家賃滞納の件で大家在

来て、オレのギターに触れた時、依緒はどうして、あんなに怒り出したんだ？」怜が質問した。

「当たり前だよ」依緒は、ブランコに漕がずに座っていた。「例えば、バッハの人生のどこからでも、一週間くらい楽器と楽譜を取り上げたら、どうなる？」

「作曲ができない？ 彼に音感があるなら、作業がやりにくくなるくらいかな？」

「だとしても、それだけで音楽の歴史に大きな損失が残るでしょう？ 学ぶべきことを学び遅れるかもしれないし、生まれるべきだった曲が生まれてこないかもしれない」

「……うん」

「私たちの協会は怜クンを、そういう者として扱っているの」

「……なんだかな、なかなか荷が重いな」

ブランコから飛び降りた依緒は、ベンチに座る怜に歩み寄った。

「今度は、私から質問するね……」依緒が言った。

「何？」

「どう訊いていいのか、わからないんだけど」依緒の表情が陰った。

「何を？」

「……私が、音楽を続けさせたせいで、怜クンは、苦しんでない？」

「まさか！ どういう意味だよ？ 依緒には助けられてばかりなのに」

「イディアー保護協会の話は、秋佳さんから聞いたでしょう？」

「私たちが過去に助けてきたたくさんの音楽家たちは、みんな素晴らしい才能を持っていたって。」

でもね、その中の多くの人は、あんまり幸福な一生を送っていないだよ。若くして亡くなってしまう人もたくさんいるんだよ。

どうしてそうなってしまふのか、って秋佳さんに訊いたこともあ

る。

そうしたら……

皆一人一人が、自分自身の心で、魂で、ありのままの美を感じ取れるようになること。

それは素晴らしいことだけど、人の心を支配するために生きている人たちにとっては不都合なことなんだ、って。

この世界には、いつの時代にも、新しい美の価値観が勝手に生まれてくることを、好まない人たちがいる。そういう人たちは、様々なかたちで芸術家を攻撃したり、仲間外れにしたりする、って。

だから、イディアー保護協会は、時代を変革するアーティストたちを、抑圧から守らなければいけない。

それができなかったのは、協会の力不足だったんだ、って。

でも私たちがもつと努力すれば、改善できることだって。

これからは、素晴らしい芸術を生み出すことと、幸福な人生を送ることは、両立できる、それは難しいことじゃないって、言ってくれた。

私も、それを信じてやってきた。それを信じられたから、やってこられた。

なのに、それなのにね……………」

依緒は泣き声を上げた。

「鋼クンが、死んじゃったんだよ！」

「それは依緒が悪い訳じゃないだろう！」怜が耐えかねて、ベンチから立ち上がりながら叫んだ。

至近距離で向かい合った依緒の言葉は止まらなかった。

「普遍的な美があるのはわかるよ。何十年、何百年経ってもずっと愛され続ける音楽。それには確かに、普通のものとはまるで違う、ものすごいエネルギーがあるって。

でも、それを維持するために、アーティストがずっと苦しみ続け

なきやいけないんだったら、意味ないじゃない！ イディアーは人の幸せのためにあるんだよ！」

「依緒……もういいんだ」怜はそれ以上何と言っていていいかわからなかった。

「絵美ちゃんが、怜クンに訊いてみるって言ったけど」依緒は怜に駆け寄った。「もう、わかったよ、私は……」

「今の私には、怜クンが一番大事なんだ……」

依緒を抱きとめた怜は、そこで自分の中の依緒への想いを確信させるを得なかった。

しかし同時に、他の誰かがやるべきことを、自分が説明なく引き受けさせられているかような違和感もあった。

怜は、その解せない感覚の原因を探ろうとした。

肌の白さから雪を連想させるような彼女の体温は意外なほど熱く、怜の背中まで回った細長い腕は意外なほど力強かった。

「依緒……君は、このオレじゃなくて、オレの音楽の方を……」

「違う……もう、その話とはつくに解決してるの……」

「怜クンを、危険な目に遭わせるくらいなら……もう……」

（これで、オレの音楽は終わったのかもしれない、それでいいのかもしれない）

怜はその時、依緒の存在以外は、何も感じたくなかった。

第12章

あれ以降、依緒からの想いを、怜はどう受け止めてよいかわからないままだった。

彼女へ何らかの意志を示さなければいけないことはわかっていたが、何もできずにいた。

下層階級としての劣等感もあったかもしれないが、依緒を今までずっと、どこか遠い存在に感じていたことに気づいた。

依緒からの連絡は、徐々に少なくなり、内容も事務的になっていった。

依緒は、怜が未だ音楽に対する興味と向上心を失っていない、ということを確認すると、安心した様子を見せた。

まるで、「ちゃんと食事をしている」とだけ言えば安心する、母親からの「安否確認」に似ている、と怜は思った。

アーティストとマネージャーの恋愛は通常、会社から禁止されている例が多いのを、怜は知っていた。アイオンレコードもその例外ではなく、依緒は頭を冷やしているのかもしれない、彼はそうも考えた。

怜は、もっと大きな心の問題を抱えていた。

自分にとって鋼の死が何を意味するのか、という答えのない問いから、抜け出さねばならなかった。

始めはしばらくの間、イエローアウルからの仕打ちと同様に、鋼からも裏切られたような気持ちになり、自暴自棄になってみたこともあった。

逆に、自分よりも才能がある鋼をリーダーにしておけばよかった、

という後悔の念で自分を責めてみたりと、怜の思考は混乱が続いた。

フロッグズのアルバムの売り上げは、2000枚以上に達した。これは、ライブ活動を一切行っておらず、プロモーションもできていない新人バンドのセールスとしては、異例のことだった。

しかし、怜はこれをすべて、元マスターフェイスとしての鋼のおかげだと解釈した。

今はイエローアウルも、とても有名なバンドになった。しかし、怜がイエローアウルの元メンバーであることは、彼らの新しいファンのほとんどには知られていないことだった。怜はデビュー前に脱退したのであり、そこは鋼と事情が違ったのだ。

依緒から、印税の振込について連絡があった時も、決して怜は喜ぶことができなかった。家賃を立て替えてくれたアイオンレコードに借りを返せる、という安堵感以上には何も感じなかったのだ。

（これは、本当にオレが受け取っていいものだろうか？）

それを口に出せば、依緒を無意味に苦しめてしまうことはわかっていた。

時間が経つにつれ、怜は、音楽をやり続けなければいけない、ということに気づき始めていた。

まず、演奏に心を集中させている間だけ、気持ちが楽になる、ということを知っていた。そして、死んだ鋼の分までも音楽を続けなければならぬ、とも感じた。

しかしそれは、実存的な意味での使命感だった。もうすでに、音楽業界で成功したい、という願望は、少しずつ消えつつあった。

ライブに出演させてもらえる場所が見つからないのは相変わらずだった。上昇志向を失った怜は、そのことを悔しく思う気持ちすら失せ始めていた。

（成功しなかったバンドマンはだいたいみんなこんな気持ちで、音

樂をあきらめていくんだろう。オレだけが特別じゃないんだ)

依緒から疎遠になった怜の救いは、莊太の存在だった。

彼とは、唯一残ったメンバーとしての絆もあった。が、それ以上に、莊太とふたりで演奏することで、彼から学ぶべきことがとても多いことに、今さらながら気づいたのだった。

莊太は、並外れたリズム感、テンポ感があるだけでなく、リズムについて独自の算術的アイデアを持っていた。彼は、長期に渡る不登校児で、数学の知識など皆無であるにも関わらず、因数分解と順列組み合わせの演算能力に優れ、それらをドラムの演奏に応用していたのだった。そのためか、彼は誰にもマネできないような複雑なポリリズムを叩くことができた。

莊太の自宅や、児童遊園などでの、膨大な時間のジャムセッションの中で、二人は互いのアイデアを発展させ、息の合った演奏に極限まで磨きをかけていった。

しかし、それはまったく無目的なエネルギーだった。誰に聴かせるためでもない、自分たち自身の楽しみのための。

そんな状態が、約一年ほど続いた。

その日も、ふたりは莊太の家で、小音量で練習をしていた。怜のアパートよりは、いくぶん壁が厚いようだったからだ。部屋は散らかってはいたが、以前ほどのゴミの山はなくなっていた。怜も来る度に、掃除を手伝っていたのだ。

初めの頃は、天気の話題にすら返答に困るほど会話が苦手だった莊太も、最近は怜とよく話をするようになっていた。

「莊太」

「ん？」

「今さらだけどさ、最初に依緒と会ったきっかけって、何だったの？」

「いや……いきなりうちに来て……」

「それで？」

「『何か楽器、やってますか』、って。それで『はい、ドラムを』って言ったら、『聴かせて下さい』って上がり込んできて」

「それが初対面？」

「うん、ちよつと依緒が言ってたのは……何か感じるらしいよ。あのコは特別、よくわかるらしい、遠くからでも……それ、なんて言ってたっけ」

「イデИАーか？」 怜は、だいぶ前に秋佳から聞いた言葉を思い出した。

「それだ」

「莊太は、それを信じるのか？」

「うん、だって……ヘタクソな演奏でも、なんか伝わってきて、すごく心を打たれる時ってないか？ 逆にうまい演奏でも、何も面白くないのもあるだろう？ ただ器用なだけで」

「……確かに、そうだな」 怜には、それが思い当たることが度々経験していた。

「音楽って、何かがあるんだと思うよ。僕らには、よくわからない何か……」

「イデИАーについて、もっと知りたいな」

怜は、依緒と次に話す時には、聞き出したいと考えていた。

「依緒は言ってたよ、怜のイデИАーは特別だ、って、あんなのは見たことない、って」

「そんなこと言ってたのか？」 怜は驚いた。

莊太はうなづいて、言った。

「一番まずいのは、世間の人たちが、それにまったく気づかなくなってることだ、って」

その時、怜の携帯が着信した。

「依緒だ・・・もしもし」

「一週間ぶりになっちゃったね、今大丈夫？」

「うん、今、荘太の家にいる」

「荘太くんもいるんだね！　ちょうどいい、実は、久しぶりにライブができそうんだけど、オフア―を受けるかどうか、二人で決めてほしいの」

「えっ！」

「ものすごく急なんだけど、5日後、東京郊外にある中央公園の野外ステージで、恒例で6年目のコンサ―トをやるの。キャパは200人以上だから、今までで一番の大舞台だと思う。」

同じ日には、他にもメジャーアーティストがたくさん出る大規模な野外フェスティバルがあつて、交渉していた出演者がかなり引き抜かれちゃったみたい」

「それで、オレたちに白羽の矢が立ったのか」

「しかもね、ヘッドライナーは、あのパット・デイヴィスだよ、10年ぶりの来日だつて」

「えっ！」　怜もその名前は知っていた。怜は昔から、有料の音楽を自由に聴ける経済状況にはなかったため、彼のアルバムは持っていなかったが、ジャズを習い始めた当時に、三野の家でよく聴かされていた作曲家、サックス・プレイヤーだ。

「ただしね、これはNPO主催で、ノーギラなの。後進国に教育支援するチャリティーで、アイオンレコードは協賛金を支払うつもりだから」

「それなら、なおさらやりたいね。荘太とも相談しなきゃいけないけど」　怜は即答した。

「だつてオレたち、公園でのライブなら百戦錬磨だし」一度、自暴自棄を通り抜けると、こういう種類の冗談が言えるようになるんだな、と、怜はその時思った。

「でも、ベースもキーボードも不在でどうするんだ？」

「後任のメンバーは、一年間私もずっと探していたんだけど、こちらの条件すべてに当てはまる人が見つからなかったの……でもね」

「実は、キーボードだけは、候補が一人いたの、私のものすごく近いところに。本当は頼りたくなかった人なんだけどね……もしそのライブをやるなら、これから交渉に行つてくるから」

「なら、オレたちもいっしょにお願いに行くよ！ 莊太、出かけるよ、説明は移動しながらする！」

怜はいつの間に、莊太の了承はすでに得られているつもりでいた。

「5日後？」

依緒が深々と頭を下げているその相手、依緒の実の弟、木乃内勇が叫んだ。

「いや、待つてよ、その日の前日までは、毎日仕事が入ってるよ、だからリハーサルに参加できないって」

木乃内楽器本社の応接室に、腕組みした勇の甲高い声が響いた。彼のスケジュールには、確認するまでもなく、木乃内楽器の製品をデモ演奏するコンサート、セミナーや取材の予定がびっしり書き込まれているはずだった。

彼は国内最大手の楽器メーカーの、鍵盤楽器全般を奏するデモンストレーターなのだ。

依緒、怜、莊太の三人は、勇と向かい合つかたちで、ソファアに座っていた。

「じゃあ、当日ぶつつけでやってよ。あんたならできるでしょう？」
依緒が強引に押した。

「あのね、その日は、トラッドロック・マガジン・フェスティバルを、彼女と観に行く予定なの！ このところ予定が合わなくて、何週間ぶりのデートだと思ってるんだよ！」

「それなら、彼女もこっちに連れてくればいいでしょう！ チャリ

ティーライブの昼の部にたった30分出演したら、後は好きなだけデートしなさいよ！」

「あー、あのさ、もし親父にバレたらなんて言うんだよ。最大手のレコード会社から疎ましがられてるチャリティーライブに、木乃内楽器の顔であるオレが肩を持つことが、各方面にどんな影響があるか、考えてるのか？ 親父の顔に泥を塗りかねないんだぜ」

怜が間に入った。

「やっぱり、これはいくらなんでも無理があるよ。勇さん、突然押しかけてすいませんでした……」

「私が責任取る！」依緒は叫んだ。

父親のことは言われるのを最初から覚悟して来ていたのか、その声には揺るぎないものがあつた。

「お父さんが怒ったら、私がちゃんと説明して謝るから……」

依緒は声のトーンを落としていった。「勇はとりあえず、できる限り……バレないようにやってちょうだい」

「もう……」勇は一見、鋭くてキツそうな性格のように見えるが、頼まれると断れないところがあるようだった。「しかたないな……彼女にも謝らなきゃ……」

「それで、ついでなんだけど……」依緒がまた頭を下げた。

「何、まだ何かあるの？」勇が逃げ出しそうな体勢になった。

「ベースが弾ける人を紹介してよ、ものすごく腕の立つ人。で、できればイディアーが出まくりな人ね」

「そんな人は見つからないよ！ 知り合いでうまいベーシストはみんな、もうひとつのフェスの方に出演するんだから」

「じゃあ、どうするのよ！」

「オレに言われても……」ならばベーシスト無しでもなんとかするよ、オレが」

「ああ……そうか、そうね」依緒は、ふっと力を抜いた。

「オレ、シンセにもオルガンと同じような足鍵盤つけてるし」

勇は、足鍵盤でランニングベースを奏しながら、左手でコード、

右手でアドリブをプレイするジャズオルガンの名手でもあった。

「勇は、ラヴェルの最初のピアノコンチェルトも弾けるぐらい、左手も上手だからね」

依緒の言うラヴェルのピアノ協奏曲第一番は、左手のみですべてを演奏する超難曲である。さらに、彼の左手は、ロックベースを表現するに十分なグルーヴ感をも持っていた。

つまり木乃内勇は、鍵盤楽器のオールラウンド・プレイヤーということでは、日本の最高峰にあり、そのテクニクは絵美すら凌駕する達人だったのだ。

「しかし、姉ちゃんはいつから、こんなに押しが強くなったんだか・・・昔は、置物みたいにおとなしかったのに、人って変わるものだよね」

「勇君、本当に無理言ってますいません、よろしくお願いします」

「いえいえ、こちらこそ、よろしくね」勇も一礼した。

「もしかして、怜君は、『イディアの源泉』ってことになってるの？」

「勇、何でそんなこと知ってるの？」

「いや、オレは協会員じゃないからよくは知らない。ただ、オレも小さい頃、おじいちゃんからイディアの話は聞かされていたから、勇は答えた。

「おじいちゃんは、姉ちゃんよりも、一応長男であるオレに、協会員として跡継ぎしてもらいたかったみたいだった。でも、生意気なガキだった当時のオレは、胡散臭いって思ってたから、無理強いはされなかったよ」

「勇は、イディアを信じてないの？」依緒が、今まで弟には避けてきていたその質問を、あえて訊いた。

「よくわからない。でも、オレだって演奏活動をやっていて、不思議な体験することは時々ある。音楽は、ただの音の集まりじゃないって、理屈抜きで感じるんだ。何か人智を超えた、想像もつかな

い力がある、っていうのか……」

「イディアーっていうのは、結局何なんですか？」

怜はどうしてもそれを知りたかった。

勇は言った。

「うちのおじいちゃんの話では、この地球の魂、だと言ってた。地球自体の美的感覚、みたいなもので、本来は、根っこでつながっている人類全体の精神の一部だとも」

「地球の魂？」 怜は眉にしわを寄せた。

そこで依緒が説明を受け継いだ。

「例えば、美しい花の造形とか、クジャクの羽とか、自然の絶景…… ああいうものがまったくの混沌と偶然の中から生まれてきたものだって、本気で断言できる？ あれは宇宙の法則に基づいてイディアーがデザインしたものだって言われてる。」

そして、イディアーが人間の心と身体を通して表出するもの、それが芸術なの。

私たちの協会は、中でも音楽を最重要視しているの。もっとも抽象的で物質世界から遠い表現である音楽からは、イディアーが本来のエネルギーを保ったまま表出される、と信じているから」

突然の地球規模の話に圧倒された怜だったが、ここですべての疑念をはつきりさせるため、怯まずに尋ねた。

「それで結局、そのイディアーが、どうしてもそんなに大事なの？」

「イディアーは、人類にとって重要なエネルギーだから。人間が高度な精神を持つ動物に進化したこと、そのものに関わっているの。これからも人類の精神が進化し続けるために、どうしても欠かせないものなんだって。」

人間は大昔には、音楽から簡単にイディアーを発生させることができた。でも今はエゴによる商業主義が音楽を支配していて、それを聞き分ける感性が、人類から急速に失われつつあるの。

今の音楽シーンに懐古趣味が続いているのは、過去の優れた音楽

には、確かにイディアーが溢れていたから。人は自然にそれを求めて、後世に伝えていくの。

でもね、本当はイディアーは、斬新なもの、進化したものを好むの。昔つくられたものからは、少しずつイディアーは枯れていくしかないの……」

「それで、新しい時代のアーティストが、新しいイディアーの源泉となるべきなのか……」勇は珍しく姉の話に聞き入っていた。

「怜クン、この話を信じるか、信じないかは、実はそんなに重要じゃないの。」

ひとつ知っておいてほしいのは、イディアーは無邪気さを持っている人、何かに夢中になっている人が大好きなの。子どもみたいにね。そして、見え透いた作為や、打算が大嫌いなもの。

だから、イディアーを意図的に呼び出したり、つくり出したりしようとした、協会の過去のあらゆる試みは、すべて完全に失敗に終わっているの。

でもフロッグスのみんなには、イディアーを呼び出す特別な才能がある。

今まで怜クンにイディアーを説明しなかったのは、もったいぶっていたからじゃない。つかまえようと意識すればするほど、イディアーは逃げていってしまうのよ。イディアーを、新しいテストの採点基準のように考えてほしくなかったの」

「それなら……今まで通り好きなように、音楽をやればいいんだね」莊太が言った。

「その通りだな」怜は、莊太の肩を叩いた。

彼は、イディアーそのものよりも、依緒を理解できた気になれたことがうれしかった。

第13章

フロッグス、約一年半ぶりのライブが近づいていた。

このフェスティバルは、終日行われ、9組のアーティストが30分から1時間ずつ出演する。したがって、リハーサルは前日に行われた。

リハーサルでは、フロッグスは勇抜きの二人だけで演奏せざるを得なかった。これはイベントのエンジニアやその他のスタッフにとっては大きな負担になる問題で、秋佳と依緒はその調整に追われた。目の前にある、2000もの空席を前にしただけで、怜は足がすくむ想いだった。

（これが明日には、人で埋め尽くされるんだ）

その時にどんな精神状態になるのか、怜には想像もつかなかった。

そして、当日。

彼らの出演順は、昼の部の半ば、13時の予定だった。

12時を過ぎ、フロッグスの前の出演であるトリオ『ボクシン』

の呪術的な演奏が始まった。彼らは、アイオンレコードの海外契約アーティストだ。

和太鼓と、ガムランの打楽器を組み合わせた独自のパーカッションキットによる複雑なリズムが、オーストラリア先住民のパイプ状の楽器「ディジュリドウ」の野太い低音と絡み合い、会場を異世界に変えてしまった。

荘太は、ボクシンをすっかり気に入ってしまい、自分の出番のことも忘れて舞台袖で聴き入っていた。

しかし、依緒は気が気でない状況だった。まだ勇が到着していなかったのだ。

ボクシンのマネージャーと、イベントのスタッフとの通訳をやらざるを得なかった依緒は、ボクシンの三人がステージに上がってからようやく、勇の遅れに気づいた。

「遅くなるとは言ってたけど、まさかこんなに……勇はこういうことで時間に遅れる子じゃないから、油断してた」

依緒は、怜にそう言うとおわてて勇に電話を入れた。

「もしもし、勇、あんたどこにいるの？」

「もう下の道に来たから、あと数分で着くよ」

彼はハンスフリーの携帯で、車の運転席から答えていた。電話から派手なエンジン音が聞こえた。

「まさか、勇、あの平べったいスポーツカーに乗ってるの？ 機材はどうしたの？」

「こんにちはー」

助手席から勇の彼女があいさつした。

「実は、親父に見つかっちゃってね、来る寸前に」

「えっ？」

「めちやくちやに怒られたよ、結局オレが一人で」

「それでどうしたの？」 依緒は頭が真っ白になりそうだった。

「事情を説明したら、『どうせ断れない仕事なら、思いっきり木乃内楽器の宣伝して来い』って、機材をいろいろ貸してくれたよ。昔の電子オルガンから開発中のシンセまで、かさばるものばかり。積むのに時間がかかり過ぎたよ」

「どうやって運んでるの？」

「大型トラックが後ろからついてきてる。機材を組み上げるのに若い社員をひとりローディ役で連れてきたから、そいつが運転してるよ」

勇のイタリア車とトラックがステージ裏に着いたのは、ボクシンの最後の曲が終わりかけたときだった。

ローディは、運び出しにイベントスタッフの手も借りながら、トラックの中の主要な機材を、ステージで手早く組み立て始めた。持ってきた全部の機材はステージに上がらなかったが、勇が今回の演奏で使いたい楽器は全て、セッティングすることができた。

フロッグスの演奏は、5分押しスタートの予定となった。ステージに上がる寸前、勇は怜に声をかけた。

「本当は、姉貴からフロッグスのアルバムを聴かされた時、いつか君たちと共演したいと思ってたんだ。こんなに早く実現するなんてね」

「本当に、今日はなんてお礼を言ったらいいのか」怜は言葉に詰まった。

「今日のオレは、販売促進用の小ぎれいな演奏はしないぜ。アドリブソロで対決するつもりでやろう」

日本最高峰のデモンストレーターから挑戦を受けたのだが、怜は時間が迫るステージのことで頭がいっぱいだっただからか、謙遜の言葉を考える余裕すらなかった。

「うん」怜は単純にそう返事すると、勇に手を差し伸べ、握手した。依緒はそれを見て、荘太の手を握り、怜と勇が組んだ手の上に乗せた。

四人が手を重ねた円陣が出来上がっていた。なぜか、日本のアーティストたちがライブ前にやる円陣である。

「そういえば初ライブの時」依緒は言った。「こういうのやらなかったね」

「よし、今できる最高の演奏をしよう、行くぞ！」怜が声を上げた。「おう！」三人が答えた。

フロッグスの、30分のステージが始まった。

前に出演したボクシンは、オーディエンスをかなり盛り上げてい

た。その会場の熱気は、ステージに立つことが久しぶりだった怜には、かえってプレッシャーに感じられてしまった。

演奏は、怜が作曲した「キマイラ」から始まった。荘太のドラムのグルーブ感に、始めから勇の左手のベースがうまくノッている。

その上に、ギターのメロディが奏でられるのだが、怜は自分の演奏に何か違和感を感じていた。

緊張のためなのか、手がいつもの自分の手でないかのように、ギクシャクした。もしかしたら、このところの練習過多と、さきほどのウォーミングアップのし過ぎで、腱鞘炎の症状が再び出始めたのかもしれない。

（ああ、何かうまくいってない）

怜は演奏しながら、違和感の原因を考えていた。

演奏の粗雑さから、目立たないながらも所々ミストーンやノイズが出始め、怜は苛ついた。

（どうしてもピッキングと運指が雑になってしまっ

あがっているのか？

力が入り過ぎなのか？

手の調子が悪いのか？

モニターバランスがよくないのか？

それとも元々オレの実力はこんなもんだっただけか？

オレのイディアーは、今どれくらい出ているんだろう？）

（イディアーを新しいテストの採点基準にしないで！）

怜は、依緒の言葉を思い出した。

（ごめん、依緒。君は、いつもオレのためにベストを尽くしてくれ

て……顔を合わせる度に、どんどん成長して行って、きれいになって……。

なのにオレは、依緒のために何もしてあげられない。自分のことすらできてない。肝心な時に、いつもヘマをしてしまうんだ。今日みたいに……クソ！

本当は、鋼じゃなくて、オレが死んだ方がずっとうまくいったのに……。）

（言いたいことはそれだけか？　気が済んだら、君の演奏を始めるんだ！）

怜の脳裏で、鋼の声が響いた気がした。

気持ちがしらけてきたことで怜は、ステージにあがる前にみなぎっていた興奮が止み、冷静になりつつあった。

その頃、曲はテーマが終わり、アドリブパートへ入っていくところだった。

この曲のアドリブは、キーボードから始まる。勇は、ベースを足鍵盤に移し、左手にピッチベンダーを構えながら、右手の華麗な指使いで伸び伸びしたシンセソロを奏でた。

フレーズの語彙が豊富で、感情表現にあふれた素晴らしいソロに、オーディエンスは酔いしれ、歓声を上げた。

そして、怜にアドリブの順が回ってきた。

今の気持ちの落ち着きをそのまま表すかのように、たつぷりと間をとったシンプルなフレーズから始めた。それに反応して、荘太と勇も、静かな伴奏でそれを支えた。

やがて、そのモチーフは他のアイディアと混ざりながら複雑化し、音域も高い方へ移り、演奏は活力を増していった。

覚醒時と睡眠との境目を意識することがないように、怜は知らず知らずのうちに、演奏へと集中していた。

ステージの袖で、身動きもせず見守っていた依緒が言った。

「来る……」

真夏で汗ばむ依緒の肌に、にわかに鳥肌が立った。

源泉とつながった怜の精神から、たゆまぬ練習によって制御されたその指先へと、イディアーは流れ始めた。

イディアーはそのまま鉄弦の振動に乗って、エレキギターのピックアップの磁界へと巻き込まれ、電流の周囲で螺旋を描きながらケールブルを伝っていった。

アンプによって増幅されたその超自然的なパワーは、ステージ脇の巨大なスピーカーから、この物質世界へ、空気の振動となって姿を現した。

地球の魂の奥底から呼び出され、この世に具現化した喜びに狂乱したイディアーは、その場にいた2000人の観客へ向かって、容赦なく襲いかかった。

目には見えないが、その気配は会場にいたほとんどすべての者に感じ取れた。イディアーは咆哮し、乱舞し、観客ひとりひとりの耳へと侵入し、同時に会場全体を飲み込んでいった。

莊太は、怜の強烈なエネルギーに煽られ、手数が多いパワフルなドラミングへと移行していった。

怜のプレイが、瞬間の気合いを込めた水墨画なら、莊太は、緻密な点描画だった。そして、そのふたつの絵が重なり合うことで、さらに深いヴィジョンが映し出されるようだった。

「これがイディアーの源泉かよ？」勇は今まで感じたことのない異

変に一瞬動揺した様子を見せながらも、怯まずに演奏を続けた。この凶暴な怪物を、音楽という檻の中にとどめておくには、自分の堅実なプレイの支えが必要だ、と直感しているようだった。

怜の内側から溢れ出るイディアーは、掘り続ければいつかは枯渇する、石油や石炭のようなものではない。使えば使うほどにわき上がってくる、無限のエネルギーだった。

（わかってきた、依緒が言っていた意味が。

依緒は、イディアーをこの世に送り出す、『目的』を持っている。でも、オレは『無目的』でなければいけなかった。

昔からいつも、オレはみんなに言われてた。

「音楽なんか一生懸命やって、何の役にたつの？」と。

「売れっ子になったら、どれぐらい稼げるものなの？」と。

でも、オレには予感があった。

本当にオレの心を満たしてくれるものっていうのはきっと、一見、世間の役に立ちそうもないものから生まれてくるんだ）

曲はアドリブパートの後、テーマの繰り返しからコーダへ進み、そして最後に三人の息がぴったりとあった複雑なフレーズを決めて、演奏が終わった。

ステージが沈黙したが、オーディエンスの反応はすぐには帰って来なかった。

はじめ、観客はそれぞれに違った様子を見せていた。

呆然としている者もいた。

今何が起きたのか、ひそひそと話しているカップルもいた。

無意味に叫び声を上げる若者達もいた。

イタズラにハメられたかのように、肩を叩き合いながら笑い転げている友達連れもいた。

「Oh, my God... Oh, my God...」
と繰り返しながら、震えている外国人もいた。

そんなまちまちな反応が30秒ほど続いた後、客席の所々からパラパラと拍手が起こった。

拍手は伝染し、歓声を交えながら、会場全体に広がっていった。それが、異常なほどの熱狂に変わるのには、それほど時間はかからなかった。

怜はこの外落ち着いて、観客に手を振って応えようと、二曲目の準備を始めたが、興奮したオーディエンスが少し静かになるまで、しばらく待たなければならなかった。

「やったな」秋佳が、隣の依緒に言った。

「やっと・・・」依緒は、一息つくようにつぶやいた。

「やっと、伝わった。私が感じてきたことの、ほんの一部だけど」

フロッグスの残りの3曲の演奏も、観客から並々ならぬ反応を持って迎え入れられ、彼らはステージを後にした。

依緒は、ステージ袖に戻ってきた汗びっしょりの怜に、飛び込むうとして両手をいっぱいに広げた。

しかし、鉛を背負ったかのように重い怜の足取りを見ると、あきらめたように手を降ろし、三人を控え室へ誘導することに専念した。
「よくやったね、みんな」依緒は声をかけた。

「なんか変なものが出てきちゃったみたいだな」怜が笑った。「こ

れから、ペース配分も学ばないかね」

イベントのスタッフたちは、演奏を終えたフロッグスのメンバー、特に怜を、畏敬の念を持って見つめていた。演奏を始める前と、周囲の視線が全く違うものになってしまったことに、怜はやや戸惑っていた。

「Oh, you're awesome!!」

突然怜の元に、通路の向こうから大柄な黒人が駆け寄ってきた。この後に始まる夜の部のトリで演奏するジャズ/フュージョンの大御所、パット・デイヴィスだった。

次々とまくしたてるように話しかけてくるパットを前に、怜は「サンキュー」以上の言葉が出て来なかった。依緒が代わりに受け答えするが、会話が弾んだため、依緒には怜にすべての内容を通訳する余裕がなかった。

パットと別れると、依緒はうれしそうに怜に説明した。

「久しぶりに興奮させられる新人を見た、って言ってたよ。フロッグスがなぜ日本で無名なのか、今どきという活動をしているのか聞かせてほしい、って。後でまた、私が話をしてくるよ」

イベントの昼の部が終了し、インターバルの時間になった。

控え室にいた怜、依緒、荘太のところへ、勇がいつしよに来た恋人と近づいてきた。もう早々と帰り支度を済ませたようだった。

「お疲れ様！」勇が怜に声をかけた。「またいつか、いつしよに演奏しよう」

そう言って、ふたりは握手を交わした。

「これからふたりで、トラッド・ロック・フェスの方を観に行くの！今から行けば、ヘッドライナーのイエローアウルには間に合うと思うからあ。もう出ようよ！じゃあね！」勇の彼女が高いハイ

ヒールで踏ん張りながら、勇の腕をドアの方向へ引つ張った。

「はい、今日はありがとうね、いつてらっしゃい」依緒はおおげさに手を振って、カップルを見送った。

それとほぼ入れ替わりで、控え室に18〜9歳の女のコが尋ねてきた。

鋼の妹、麻矢だった。

「ああ、来てくれたんだね」怜は、開いたドアの向こうにいた麻矢と、ドアを開けた依緒の方へ走っていった。

麻矢と会うのは、鋼が亡くなってから数日後、以来だった。

「はい、チケットを送っていただいて、ありがとうございます。実家へ戻ってから、あまり表へ出かけなくなっていたんですけど、いい機会になりました」

麻矢は、鋼と似て整った顔立ちをしていた。あの日から比べてだいぶ痩せてしまったこともあって、メジャーデビューを控えた歌手としてのオーラは失われてしまっていたが、依然としてとても可愛い女のコだった。

「今日のフロッグスのライブ、なんて言っていていいかわからないんですけど、とにかくすごかったです！」

「ありがとう」怜はにっこりしてみせた。

「やっぱり音楽を表現するって、素晴らしいですね。私も、歌をやり直したい、って思い始めました」

「ぜひ、そうした方がいいよ」依緒は言った。

「それから・・・」麻矢はうつむいた。

「私、お兄ちゃんがあんなことする人じゃないって、今も信じてるから、お兄ちゃんが死んだ原因を、知りたいんです。私、どうしてもエンペリアルのおことがおかしいって・・・」

「そうだね」依緒が、言葉に詰まる麻矢に応えた。「私たちアイオンレコードには、それを調べるのに協力してくれる人たちがいて、

もういろいろわかってきていることがあるの。今は公表できないけど、麻矢ちゃんと家族の方には話したいと思ってる」

「えっ！」麻矢は顔を上げた。

「でもね」依緒は続けた。「これは忘れないで。麻矢ちゃんは、自分自身の人生を進んでほしい。悲しみとか、疑いの心だけで自分を燃え尽きさせたらダメだよ。私たちもできるだけ、力になるから」そして依緒は、号泣する麻矢を抱きしめた。

ヘッドライナーであるパット・デイヴィス・バンドの演奏。怜はそれを、依緒、莊太と共にステージ脇から観ていた。

その演奏は、怜が子どもの頃に三野から聴かされたものとは、まったく別次元の音楽だった。60歳を過ぎてもなお、情熱を忘れず、流行にも媚びずに、進化している彼の姿は、このライブの大トリに相応しい、怜はそう感じていた。

（オレは、彼の歳になるまで、音楽を続けていけるんだろうか？）
怜はそんなことを考えていた。

第14章

「今日は、依緒にも会議に参加してもらえてうれしい」

イディアー保護協会・協会長がディスプレイの向こうから訊いてきた。

「昨日のライブでかなり疲れたのではないか？」

「いえ、大丈夫です」依緒は恐縮していた。

「彼女はよくやってくれました。東京支部の他のスタッフを、昨日のライブイベントにあまり回すことができなかったもので、彼女の負担が大きかったです」秋佳が応えた。

「フログスの演奏については、すでにこちらでも確認している。

あんなイディアーが噴出したのは、いったい何十年ぶりになるだろうか。これも、君たちの働きのおかげだ」協会長は喜びを隠せなかった。

「ありがとうございます」依緒は一礼した。

「会場が日本だったから、まだオーディエンスの行儀が良くて済んだ。もしアメリカだったら、興奮した観客がステージへ押し寄せてパニックになっていたとしてもおかしくない。それくらいの衝撃を世間に与えられたはずだ」メンフィス支部長も絶賛した。

「場合によっては、一生彼らの下積みを支えていくことも考えなければならぬ状況だったと思うが、君たちの尽力で、彼らが世間で正当な評価を得るための軌道に乗せることができたんじゃないか？」本部長の感想だった。

「いや、それはまだ、どうでしょうか」秋佳が口ごもった。「マスコミの反応などもまだ、わかりませんし」

「今回フログスに声をかけてきたのは、フォースレコードというイギリス資本の企業で、日本でも第4位の大手メジャーです。調査の結果、現状この会社のアーティストに対する抑圧は、ごく一部の

ディレクターを除いてかなり低い傾向にあり、フロッグスを預けても彼らの音楽性を阻害する要素はほとんどなさそうです」ウィーン本部の副部長が説明した。

「彼らが商業ベースに乗りながら、なおかつ自分たちらしい音楽を続けられる状況があれば、それはそれに越したことはないのでは？」メンフィス支部長が口を挟んだ。

「もっと問題なのは、日本は世界でも有数の『抑圧者』が巣食う場所だ。ただし、フロッグスの音楽は、その日本という土壌で育ってきたものの故に、そこから引き離して安全な外国に移せば良い、というものでもないがな」本部長は言った。

「もしフロッグスがアイコンレコードの手を離れるとしても、協会からの見守りと精神的サポートは引き続き必要でしょう。」

彼らのような無名バンドが、業界大手の二社からあそこまで徹底した活動妨害を受けてきた理由は何でしょうか？ それは、彼ら大企業の間がイディアーを感じる能力を持っていることはないにしても、フロッグスがこれから音楽業界に大きな波紋を投げかける存在になり得ることを、直感的に気づいているからではないでしょうか。少なくとも、放っておくとやっかいになるもの、として見ているはずです。

彼らが、フォースレコードの傘下に入ったとしても、必ずしも安全な状況とは言えません」

と秋佳は、協会が今後もフロッグスとの関係を維持し続けることを主張した。

「それはもちろんだ。しかし、もっと警戒すべきことがある。抑圧者が我々の意図に気づき、協会を直接攻撃してくる事態は避けなければならぬ。そのためにも、比較的早く自立できそうなフロッグスは、早い時期に巣立たせるのが良策だろう」協会長が言った。

「エンペリアル社の巨悪を暴く策も、早急に進めましょう。彼らがいる限りは、日本でイディアーの源泉を育てることは難しいでしょう」メンフィス支部長が言った。

「すでに、その件の原案は考えてある」協会長が答えた。「向こう10年で、エンペリアルの影響力を半減させるための計画案を、後に時間を割いて説明しよう。

これは事を急いではいけない。我々の存在が彼らに敵視されないかたちで実行されなければならないからだ。

もし協会が再び存続の危機を迎えれば、それは人類の美的感覚すべてに悪影響を及ぼすことになるだろう。そして、美しいものと醜いものの定義は、権力者、抑圧者たちによって決定され、それによって、この社会は彼らが支配しやすいような差別、偏見が横行する、野蛮な世界と化すだろう」

協会長は単に保身からそのように言っているのではない、と秋佳は自分に言い聞かせていた。協会は、これから恒久的にアーティストを支援していかなければならないのだから。

「鋼君の死の真相を世間に明るみにしていくことは容易ではないが、協会としてはこれを成し遂げなければならない。

一方で、アーティストにとって、復讐心ほど致命的な毒はない。

怜君、莊太君が、それに侵されることのないよう、東京支部では引き続き充分、注意してほしい」協会長は続けた。

「はい」秋佳はうなづいた。

フロッグスの野外ライブは、瞬く間に評判となっていた。

ネット上では口コミが広がり、その場にいた者達のほとんどが感じた、名状し難い音体験について、終わりのない議論があちこちのサイトで行われた。そしてまた、フロッグスのファンサイトが次々と開設されていった。

競合イベントを主催していた、トラッド・ロック・マガジンのライターも一人だけ観に来ていたようで、彼は公式ページ上で、はばかりなくフロッグスを絶賛した。

「フロッグスのサウンドは原初的なパワーに満ち、しかも先鋭的だ。

未だジャンル名すらない、新世代の音楽を予感させるに充分だった。観客はトラッド・ロック・フェスに比べたら何分の一かだっただろう。しかし、1969年のあのフリーライブで、歴史上最も偉大なギターリストと呼ばれた彼が出演したときも、観客はまばらだったのだ」

と、屈指の伝説的コンサートまでも引き合いに出して、褒めちぎったのだった。

フロッグスのアルバムはその後、それ以前の何十倍という驚異的な売れ行きを見せた。しかしその人気は、世間のメインストリームにある情報には、一切現れなかった。どの企業が集計しているヒットチャートにも、フロッグスの名前がランク圏内に上がることは決してなかったのだ。

「移籍？」

怜は突然の話に驚いた。

アイオンレコードの事務所の応接室だった。

「先日のライブのトリに出ていたパット・デイヴィスが、フロッグスのことをすごく気に入ってね。フロッグスの活動について、相談に乗ってくれたの。それで、移籍を後押ししてくれるって」依緒はうれしそうに言った。

続けて秋佳が説明した。

「やはり、今のフロッグスの注目度に見合ったライブやプロモーションを充分にやっていくためには、残念だが、我々アイオンレコードではまだまだコネクションが足りないのだ。エンペリアルやウルテーマのような最大手の企業から睨みを利かされている状態だな。パット・デイヴィスは、外資系フォースレコードの所属で、フロッグスもその傘の下に入れば、他社の圧力から逃れて、たくさんライブ活動ができるようになる」

秋佳の説明によると、ギャラやその他待遇の条件は、アイオンレコードよりもフォースレコードの方が桁違いに良い、ということだった。

思ってもみなかったかたちで、夢のメジャーデビューへの打診が来た。

しかし、怜はまったく納得がなかった。条件の中にも、彼にとつて大事なことがひとつ、抜け落ちていた。

「フロッグスが注目を浴びて、やっとこれから、アイオンに恩返しできるんだよ？」

いくらエンペリアルやウルテーマが邪魔をしてきても、これだけ機運が高まっている状況なら、アイオンレコードにいたままでも、必ずライブ活動できる場所は見つかるはずだ、怜はそう思った。

しかし、依緒は言った。

「怜くんは音楽シーンで正当に評価されるチャンスができたんだから、私たちから卒業するの。それがイディアー保護協会の意向だから」

「そんな、依緒はそれでいいのか？」

依緒は黙り込んだ。

「いっしょにライブツアーに出て、いろんな場所を回って、たくさんファンと出会って……。そういう経験がこれからできるんだよ。依緒がマネージャーとしてオレたちについてきてもらわないと……」

「私だって！」依緒は顔を真っ赤にして言った。「私だって、ね……」

秋佳が代わって話し始めた。

「怜君、アイオンレコードは君を見捨てる訳じゃない。これから君の活動を距離をおいて見守り、必要な時にはできる限り協力する。イディアー保護協会は、過去何百年もの間、数えきれないほどたくさんの方のアーティストの活動を支援してきたつもりだ。しかし、ア

ーティスト自身の幸福まで考えてきたか、と言われれば、たくさんの課題がある。

協会員の注意が充分でなかったため、音楽家たちの中には、社会の抑圧に押しつぶされ、若くして命を落としてしまった者も多い。アーティストの幸福よりも、芸術自体を重視してきたためだ。

しかしこれからは、その反省を踏まえてやっていきたい。特に今の日本は、誠実なアーティストに対する抑圧が厳しいところだ。何か問題が起これば、我々はすぐに飛んでいく。それが、協会の役割だからな」

そういうと、感情が溢れるのを必死にこらえている依緒の肩を軽く叩いた。

「あとは君たちの問題だ。しばらく、ふたりで話しなさい」
そう言つと、秋佳は応接室を出ていった。

「依緒、ごめん・・・今まで、何もしてあげられなくて」

依緒は、息を荒げながら首を横に振った。

「怜クンは・・・一生かかってもできないかもしれないことを、たった二年足らずでやってくれたんだよ・・・」

依緒は手の甲で眼をぬぐって、笑ってみせた。

「・・・最初にマネージメントしたのが、怜クンで本当に良かったよ」

「依緒・・・依緒、これからも、オレたち・・・」

それ以上言葉が見つからない怜に、依緒は明るい声で言った。

「私、しばらく日本を離れるの。メンフィス支部へ協会員研修に行くから。もしかしたら、そのまま、そこで仕事を続けることになるかも。だから・・・時々アイコンから、怜クンに連絡は入れると思うけど、担当は交代になると思う・・・」

「そうか」怜は肩を落とした。

「わかった・・・今までのこと、ほんとに、感謝してる」そう言った怜の声は震えていた。

その言葉を聞き終わらないうちに、依緒はさつと背中を向けた。「私もだよ、それじゃあね」息をしゃくり上げて、依緒が最後の一言を告げた。

依緒は足早にドアへ向かい、そのまま振り返らなかった。

メジャーデビューすることが、自分の人生の最大の目標であるかのように考えていた時期もあった。それが達成されれば、自分は生まれ変わることができる、と。

しかし、それは彼にとって、意外にあっけないものでもあった。デビューすることで、自分が自分以上の何か特別な存在になれる、という過大な幻想が終わったのだった。

霜井怜率いるフロッグスは、移籍後、ベースとキーボードに新メンバーを加え、パット・デイヴィスの全米ツアーのオープニングアクトの前座に抜擢された。

怜と荘太にとって、最初の海外旅行でもあった。

もし依緒が手を差し伸べてくれなかったら、できなかった経験。見られなかった景色。出会えなかった人々。聴けなかった音楽。そうしたものに囲まれた毎日となった。

言葉の壁がないフロッグスのインストウルメンタルは、アメリカでも瞬く間に注目の的となり、ツアーは途中から毎公演が満員となった。

イエローアウルにいた頃の怜は、インタビューなどで「富と名声のために音楽をやっているわけじゃない」と答える有名ミュージシャン達の言葉を、きれいな事のように感じていた。

しかし、依緒との出会いを経て、今、パットの音楽にかける真摯

な姿勢を間近で見ると、音楽家を満たしきるものは、やはり音楽そのものしかない、ということを確認ざるを得なくなっていた。

その後半年間、怜は依緒とメールでやりとりを続けていた。

依緒は、メンフィスでの新しい環境に適応することの大変さを、素直に書いてきた。マネージャーだった頃の彼女のグチをあまり聞いたことがなかった怜にとっては、距離が離れたことで、かえって依緒を身近に感じるようになっていた。

全米ツアーの途中、その日、怜は現地のガイドの車の助手席に乗り、ニードルズ・ハイウェイからの街の景色を眺めていた。

普段、怜はわがままは一切言わなかったが、この日だけは、ガイドが組んでくれていた、仕事の合間の観光予定を一人だけ抜け出して、別行動にしてほしいと頼んだ。

ガイドは早朝に車を出して、往復で1時間ほどの目的地へ、怜を送ってくれることになった。

怜も、ブルースの源流のひとつと言われるこの土地の観光を、結束の固まってきた新生フロッグスのメンバー達といっしょにしたいという気持ちはあった。

しかし、怜にはどうしても行かなければいけないところがあった。イディアー保護協会のメンフィス支部、依緒から招かれたその場所である。

（今まで依緒が常にリードしてくれた。依緒が敷いたレールを歩いただけだった。でも、これからはオレが依緒を導いていきたい。音楽以外には何も持っていない自分に、その資格があるのかどうかはわからないけど）

怜は、依緒に会って、最初にどんな言葉をかけるべきかを考えた。すると、言葉の代わりに、新しいメロディが頭の中で鳴り出した。

楽音のイディアアが、怜の頭の中でリフレインし始める。

この世に表出し、空気を振動させることを欲する、短くも美しいメロディの繰り返し。やがて世界中を駆け巡ることになるその旋律が、怜の想いを端的に表していた。

第14章（後書き）

最後まで読んでいただいて、誠にありがとうございました。

広げ過ぎた風呂敷がたたみきれしていない感もあるので、所々加筆修正しつつ、いつか続編を書きたいと思っています。

そこでは、グンと成長して圧倒的なパワーを持つ怜も描いてみたいなど。

よろしかったらご感想下さい。よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4048o/>

楽音のイディアー

2010年11月16日08時40分発行